新春対談

“こつこつ”と積み上げるブランドの真価

J-POWER社長
渡部 肇史

人とホスピタリティ研究所所長
高野 登

**「至高のホスピタリティー」を掲げて世界のホテル界に
その名をはせるザ・リッツ・カールトン。かつて日本支社長を務め、
現在は人間関係に伴うコミュニケーションを
テーマとしたセミナーなどを行っている高野登さん。
高野さんが語る、揺るぎないブランド価値を生み出す方法は
地道で人間味あふれるものだった。**

教えられるサービスと創意工夫するサービス

渡部　国内外の一流ホテルに長く身を置き、接客業を極められた高野さんが、少年期まではむしろ人見知りだったと伺いました。

高野　人と会うのが苦手で、家に誰か来ると押し入れに隠れるような子どもでした。薄暗い中、空を飛べたら何が見えるか、海の底には何がいるかと想像を膨らませて考えるのが好きだったんです。

渡部　そのようなご性格は、ホテルで働く上で役に立ちましたか。

高野　接客サービスには人に教えられるものと、自分で創意工夫するものがあります。学校や職場で仕込まれて一通りをできるようになったら、自らの想像力を駆使して仮説を立ててやってみる次の段階が求められます。私は想像力を働かせることが得意だったので、ホテルでの修業時代から仕事のやり方が自分の性に合ったのか、ストレスなく仕事ができました。

渡部　ヒルトン、ウェスティン、プラザなど、それ以前に働かれたホテルも一流どころばかりですが、ザ・リッツ・カールトンはどこが決定的に違ったのですか。

高野　私は、自分なりの工夫でお客様に一段上のサービスを提供したいし、現にやってきたと自負していたのですが、リッツ・カールトン創業者のホルスト・シュルツィさんから「サービスは一面で科学である。が、その科学を超えたところにホスピタリティーの世界がある」と教わりました。私の考えるサービスはまだ場当たり的で、体系づけなければならないと気づかされたのです。

渡部　そもそも、リッツ・カールトンの代名詞である「至高のホスピタリティー」を、日々の仕事に落とし込んでいくのは容易ではないですよね。

高野　簡単ではありませんが、毎日企画を立てる機会があることで、鍛えられました。リッツ・カールトンでは「人生そのものが企画の連続」と捉え、スタッフ個々がそれぞれの持ち場で発案した企画に対して、人をわくわくさせるか、新しい価値を生み出すか、人を幸せにするかという3つの観点から検討を加え、日々実践に移していくのです。

渡部　現場を知るスタッフ一人ひとりの創意工夫を集めて、大きなくくりの中でホスピタリティーを高めていく。その積み重ねが大事なのですね。

高野　皮肉なもので、正しく提供されたサービスはお客様の印象に残らず、よくなかったサービスが記憶に残ります。ですから、お客様の胸に刻み込まれる正しいサービスとは何かと、必死になって企画を立て続けることが評価につながるのです。

高野 登（たかの・のぼる）

人とホスピタリティ研究所所長、元ザ・リッツ・カールトン日本支社長。1953年、長野県生まれ。プリンスホテルスクール（現・日本ホテルスクール）第1期卒業後に渡米。ニューヨーク・プラザホテル、ロサンゼルス・ボナベンチャーホテル、サンフランシスコ・フェアモントホテルなどでの勤務を経て、90年ザ・リッツ・カールトン・サンフランシスコの開業に携わる。94年ザ・リッツ・カールトン日本支社長に就任後、大阪、東京の開業をサポートし、2009年同社を退職。10年に人とホスピタリティ研究所を立ち上げ、全国各地で人材、組織、地域づくりのコンサルティングに当たっている。

35年間のホテルマン人生を通じて学んだ、リーダーや組織の在り方を「品格」という切り口から語った高野登氏の近著『品格を磨く』（ディスカヴァー・トゥエンティワン刊）。

持ち味をすくい上げ得意分野を伸ばす仕組み

渡部　常に世界のトップに列せられるリッツ・カールトンが、その評価をずっと維持する難しさは余人の想像を超えると思います。むろん大本の経営理念や、それを実践に移すための戦略・戦術があってのことでしょうが、現に働いておられるホテルマンの姿にも、そうした芯になるものが浸透し、しっかり共有されていることを感じます。

高野　私の現役時代を振り返っても、リッツ・カールトンで働く喜びや誇りは、ちょっとほかでは味わえないものでした。その芯にあるのが「クレド（信条）」で、中でも基本的な信念（ザ・リッツ・カールトン・ベーシック、8ページを参照）は有名です。すべての社員は常日頃、小さなクレドカードを携帯して仕事に当たっています。クレドはリッツ・カールトンの哲学であり、それを胸に抱いた一人ひとりがある種のオーラを発して、お客様にも伝わるのかもしれません。

渡部　月並みな愛社精神を超えていると感じます。他を寄せつけないホテルで自分は働いているという充実感や自負心を、きっとみなさんが抱いていて、企業のあり方として1つの理想形ではないでしょうか。もちろんJパワーにも明確な企業理念があり、全社員がそれに適った働き方をしてくれていますが、社員一人ひとりにより深く浸透し、社外へも伝わっていく点は、ぜひ範としたいと思います。

高野　クレド経営は業界を超えて知られるようになり、また、多くのホテルマンがリッツ・カールトンで働きたいとやって来ます。ただ実際に入社すると、こんなにも大変な職場かと愕然とする。なぜなら、その人の可能性を引き出すことを日々求められ続けるからです。自分の可能性を決して見くびってはならない、あなたの得意分野を突き詰めろと背中を押され続けます。

渡部　一人ひとりの持ち味をすくい上げ、得意な分野を伸ばしていく仕組みが全社的に組み込まれているのですね。それは相当なプレッシャーでしょうね。

Takano Noboru
新春対談
Watanabe Toshifumi

高野　ええ。でも求め続けられることに耐えて、自分でも気づかなかった可能性を引き出された社員は、日々の実践を通じて、「こんなにすごい仕事ができるのか！」と目覚めますから、あとはギューンと伸びていくだけです。

スタッフに権限を譲り「動く」を後押しする

渡部　他に類例を見ないという点で、エンパワーメント（権限委譲）にまつわる制度も独創的です。リッツ・カールトンの社員には1日2000ドルまでの決裁権があると聞いて、ちょっと耳を疑ったのですが……。

高野　社員一人ひとりが自分で判断し、行動する力が与えられており、接客の場で起きた問題に金銭を伴う解決策が求められても、個人の判断で決裁してよいのです。願望やニーズはそれが最高潮の時に満たされることで感動を生みます。お客様のニーズや要望になんとしても応えたいという気持ちやアイデアが冷めてしぼんでしまう前に、行動に移すための後押しをするわけですね。

渡部　クレドの信念や価値観が身についたホテルマンなら、とっさの判断を誤ることもないのでしょう。2000ドルという金額に根拠はあるのですか。

高野　かつて米国のリッツ・カールトンで実際にあった話です。大切なお客様がホテルに置き忘れた荷物をボストンからサンフランシスコまで送り届けた際、スタッフが用いた往復航空券の代金がその額でした。急を要する荷物で、お客様が取りに戻ったり、別の輸送手段に委ねたりでは間に合わないと知り、自分で届けるよりないという現場の判断が尊重されたのです。

渡部　似たようなケースは国内でも起きることがあるのですか。

高野　大阪から東京に荷物を届けた例があります。それに要する金額の多寡はともかく、この制度の本質が「人も組織も動かすものではなく、動くものである」というリッツ・カールトンの考え方にある点が重要なのです。信念に裏打ちされた「動く」を優先する。自分が信頼されて仕事を任され、存在価値を認められて、居場所があると実感できる時、人は動かされる前に動きたくなる。そうした環境のもと、あなたの判断で、感性で動いていいと言われたら、誰だって動き出さずにはいられません。

渡部　確かにそうですね。人間教育の核心をお聞きしているようです。

高野　そういう刹那に、とりあえず上司の判断を仰ぐとか、経理のハンコをもらうとか手間取っていれば致命的にタイミングを失する恐れがあるし、せっかくの「動く」エネルギーが無に帰してしまいかねません。つまり、動こうとする人の主体性を消さないための権限委譲なのです。

渡部　よかれと判断して動いた結果が裏目に出たら、その人の処遇はどうなるのですか。

高野　失敗したっていいんです。いろいろ失敗をくぐり抜ける中で、自分の感性を磨くことこそが重要です。ただプロである以上、同じ失敗を繰り返せば笑われるという話です。

全員野球の一糸乱れぬ連携プレーを目標に

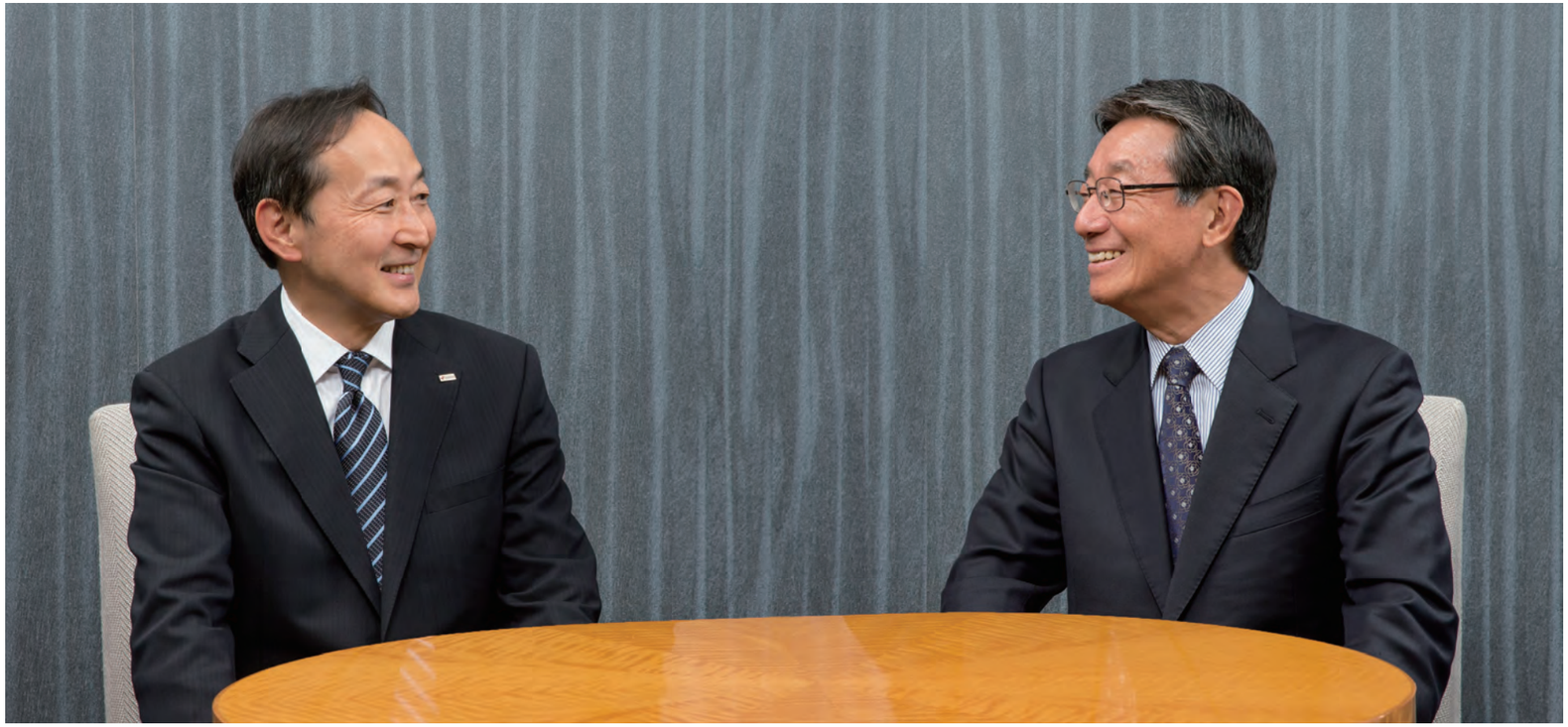
渡部　ホテル業にあっては、いろいろな職種・職能を帯びたスタッフが同時並行的に働いて、極論すれば全員で1人のお客様をもてなす局面もあると思います。我々にも似たところがあって、各職域に高い技能を持った人や専門性に長けた人がいて、彼ら全員が働く目的や使命を共有し、力を合わせることで初めて電気がつくられるし、安定供給が可能にもなるわけです。

高野　まったく同じだろうと思います。私が企業の人財についてよく言うのは、いきなりホームランバッターを育てようとせずに、まずはバントでつこつかせぐ選手を育てなさいと。全員野球という言い方が示すように、誰かが突出して目立つチームよりも、メンバーは小粒でも意思統一が図られているチームのほうが結局は強いのだと、私は確信しています。

渡部　社内を見ていて、円滑なチームプレーができていると仕事がチェーンのようにつながっていく実感があります。製造業などで「後工程に迷惑をかけない」という言い方がありますが、全員が自分の後を引き受ける人を思いやって動けば、ライン全体が継ぎ目なくつながり、各自が仕事の流れを把握しやすくもなります。

高野　その意味で、全員野球の一糸乱れぬ連携プレーを第一義とすべきなのですが、ただ、いつまでもバントのチームでは予想以上の結果は望めません。みんながヒットを打てる、ここ一番では長打も出るような底上げが必要で、それにはチーム内にスタープレーヤーが欲しい。その人の目線の高さを通じて、他の人の可能性まで引き出されることが狙いで、たまにホームランをかっ飛ばしてくれたらサービスにも彩りを添えられます。

渡部　私もそれに近いことを前々から感じていて、チーム内の他のメンバーから「あの人のようになりたい」と目標にされる人間がいるとチーム全体によい影響が出て、動きもよくなります。社内外に向けて存在感をアピールしつつ、組織を活性化するためにスタープレーヤーを養成せよという今のご指摘に、わが意を強くしました。



Takano Noboru
新春対談
Watanabe Toshifumi

マニュアルやデータを超えて働く「感性」とは

渡部　感性を磨く、感性を働かすことが大切とのお話でしたが、実は我々にも「感性」は欠かせない素養の1つなのです。日頃、発電所などでハードウエアを相手に、スペックやマニュアルがかっちりした中で働いていますが、最後のところでは「五感を働かせよ」と技術担当の副社長がよく言っています。

高野　それは、例えばどういった場面ですか。

渡部　運転中の発電設備からは様々な機械音が出ます。そのような環境下ではわずかな音の変化を聞き分けて、異常が発生していないかを感じ取る力がとても重要です。石炭火力発電であればボイラー内の炎や熱せられた部分の色・温度の変化などが要チェックですし、もしも異様な臭いを感じたら即座の対応が必要だとか、マニュアルやデータを超えたところで人間の五感がものをいう局面が多々あります。

高野　目や耳や鼻で感じるにとどまらず、その背後で何が起きているか

を察知し、適切な対応を取ることまで含めた感性であるなら、ホテルマンもまったく同じです。マニュアル通りの接客で事足りると思うのと、お客様が何にお困りで、何をお求めかを察知して即座に、時には先回りして動くのとでは、見かけのサービスは同じでも、お客様への伝わり方がまるで違ってきます。とどのつまり、自分が働くのは誰かの幸せや豊かさのためだと気づくことに、感性を磨く意味があるのではないでしょうか。

渡部　我々で言えば、与えられた業務を淡々とこなすのと、自分たちのつくる電気がエンドユーザーに届いて、家族の団欒や街の賑わいを明るく照らすシーンを思い描いて働くのとでは、身につく感性にだいぶ開きが出るかもしれません。

高野　結局、働き方の問題に行きつくと思うのです。創業者シュルツィさんの言葉に「あなたという存在の何が周りの人を幸せにしているか？」というものもあり、ここで働く限りは自らに向けてそう問い続けることが求められます。だからリッツ・カールトンで働く人はメイドもドアマンもウエイターも、お客様の幸せを日々考え続けることが習い性になってしまう。これこそが、リッツ・カールトンでの働き方なのです。

渡部　シュルツィさんはホテル業界に数多くの金言をもたらした方で、旧来の「ホテルマンは召使たるべし」といった概念も変えたそうですね。

高野　リッツ・カールトンのモットーである『We Are Ladies and Gentlemen Serving Ladies and Gentlemen（紳士淑女たるお客様にお仕えする、私たちもまた紳士淑女である）』は、彼がホテル学校時代に書いた論文のタイトルです。お客様とホテルマンを同格と見なすとは何事かと、当初は理解を得られなかったようですが、いまやリッツ・カールトンのホスピタリティーを簡潔明瞭に言いきった金看板になっています。

「こつこつ」積み上げる揺るぎない価値と力

渡部　ここまで、リッツ・カールトンという確固たるブランドを支えているバックグラウンドをご紹介頂きました。

　わが身に置き換えてみて、昨今、規制緩和による業界内の競争環境の中で、自社のブランド力というものを意識せざるを得なくなっています。ブランドを確立するに当たり、高野さんはどのようなことが大切になるとお考えですか。

高野　私は電力業界に詳しいわけではありませんが、一般論として、企業の経営判断として優先すべきはスピードかプロセスかという問題が常にあります。要するに効率優先か、愚直に進むかの二者択一なのですが、私の見たところ前者をとった会社は軒並み勢いをなくし、後者を選んだ会社が成果を上げ、ブランドを確立しています。では、リッツ・カールトンはといえば明らかにプロセス重視で、愚直に結果を積み上げてきた先に、今日の姿があります。

渡部　我々も創業以来ずっと愚直に歩んできた半面で、近年速まる一方の世の中の動きに応じて効率にも重きを置かねばなりません。我々にとりましてもいかにしてプロセスとスピードのベストバランスを見つけるかが、非常に重要なテーマになっています。

高野　であるならば、そのテーマを全社で共有し、各部署・各チームに降ろして、一人ひとりが企画マンになってアイデアや意見を出し合う形で、活況に導く方法もあるのではないでしょうか。スピードは遅くてもいいから、プロセスの中で人財を、会社を育てていこうと愚直に進んだ先に、未来も拓ける。リッツ・カールトンは決して「急がない」会社で、企業体質を一言で表現するなら「こつこつ」なんです。

渡部　我々の「こつこつ」を1つ言いますと、競争社会を勝ち抜くという観点よりも、自分たちの使命や目的はこうだという理念が先に立ちます。必要以上に勝ち負けにこだわらない美風のようなものがあります。

高野　リッツ・カールトンも無闇に競争はしません。いかにして戦わずに済む舞台をつくろうかと、戦いを省略するための「戦略」を立て、考えに考え抜いて積み上げてきたあれこれが、言うなればブランド力となったのでしょう。

渡部　こつこつ積み上げたからこその、揺るぎない価値と力……我々もそれに倣って、電力ビジネスならJパワーに話してみよう、Jパワーなら信頼できる、Jパワーとまた仕事がしたいと、広くみなさんに知られ、評価していただける会社になりたいと思います。

　今日は本当にありがとうございました。

高野　こちらこそありがとうございました。

ザ・リッツ・カールトン・ベーシック

1　クレドは、リッツ・カールトンの基本的な信念です。全員がこれを理解し、自分のものとして受けとめ、常に活力を与えます。

2　私たちのモットーは、「**We Are Ladies and Gentlemen Serving Ladies and Gentlemen**」です。私たちはサービスのプロフェッショナルとして、お客様や従業員を尊敬し、品位を持って接します。

3　サービスの３ステップは、リッツ・カールトンのおもてなしの基盤です。お客様と接するたびに、必ず３ステップを実践し、お客様に満足していただき、常にご利用いただき、ロイヤルティを高めましょう。

4　「従業員への約束」は、リッツ・カールトンの職場環境の基盤です。すべての従業員がこれを尊重します。

5　すべての従業員は、自分のポジションに対するトレーニング修了認定を受け、毎年、再認定を受けます。

6　カンパニーの目標は、すべての従業員に伝えられます。これをサポートするのは、従業員一人一人の役目です。

7　誇りと喜びに満ちた職場を作るために、すべての従業員は、自分が関係する仕事のプランニングにかかわる権利があります。

8　ホテル内に問題点（MR、BIV）がないか、従業員一人一人が、いつもすみずみまで注意を払いましょう。

9　お客様や従業員同士のニーズを満たすよう、従業員一人一人には、チームワークと幅広い協力を実践する職場環境を築く役目があります。

10　従業員一人一人には、自分で判断し行動する力が与えられています（エンパワーメント）。お客様の特別の問題やニーズへの対応に自分の通常業務を離れなければならない場合には、必ずそれを受けとめ、解決します。

11　妥協のない清潔さを保つのは、従業員一人一人の役目です。

12　最高のパーソナル・サービスを提供するため、従業員にはお客様それぞれのお好みを見つけ、それを記録する役目があります。

13　お客様を一人として失ってはいけません。すぐにその場でお客様の気持を解きほぐすのは、従業員一人一人の役目です。苦情を受けた人は、それを自分のものとして受けとめ、お客様が満足されるよう解決し、そして記録します。

14　「いつも笑顔で。私たちはステージの上にいるのですから。」いつも積極的にお客様の目を見て応対しましょう。お客様にも、従業員同士でも、必ずきちんとした言葉づかいを守ります。（「おはようございます。」「かしこまりました。」「ありがとうございます。」など）

15　職場にいる時も出た時も、ホテルの大使であるという意識を持ちましょう。いつも肯定的な話し方をするよう、心がけます。何か気になることがあれば、それを解決できる人に伝えましょう。

16　ホテル館内でお客様に場所をたずねられたら、ただ指さすのではなく、その場所までお客様をご案内します。

17　リッツ・カールトンの電話応対エチケットを守りましょう。呼出音３回以内に、「笑顔で」電話を取ります。お客様のお名前をできるだけお呼びしましょう。保留する場合は、「少しお待ちいただいてよろしいでしょうか？」とおたずねしてからにします。電話の相手の名前をたずねて、接し方を変えてはいけません。電話の転送はなるべく避けましょう。

18　自分の身だしなみには誇りを持ち、細心の注意を払います。従業員一人一人には、リッツ・カールトンの身だしなみ基準に従い、プロフェッショナルなイメージを表す役目があります。

19　安全を第一に考えます。従業員一人一人には、すべてのお客様と従業員に対し、安全で、事故のない職場を作る役目があります。避難・救助方法や非常時の対応すべてを認識します。セキュリティに関するあらゆる危険な状況は、ただちに連絡します。

20　リッツ・カールトン・ホテルの資産を守るのは、従業員一人一人の役目です。エネルギーを節約し、ホテルをよい状態に維持し、環境保全につとめます。

※高野氏が在職時に大事にしていた 20 項目。現在は 12 項目のサービス・バリューに変更されている。

構成・文／内田 孝　写真／大橋 愛

Focus on SCENE

北の高原に広がる白樺林

岩手県葛巻町（くずまきまち）と久慈（くじ）市の境界にある標高約800mの平庭高原。約369haに31万本以上もの白樺林が広がる日本最大級の白樺自生林だ。白樺林を縦断する国道281号は、江戸時代には太平洋岸の久慈や野田でつくられた塩を牛に積み、山間部の盛岡まで運んだため、「塩の道」や「べこ（牛）の道」と呼ばれた。国道281号の両側には、約4kmにわたって白樺林が続き、10～11月上旬は、白樺に加え、カエデやモミジなどの木々が紅葉する見事な景観を楽しむことができる。

（P.30から、作家・藤岡陽子さんによる岩手県葛巻町の紀行文を掲載しています）

文／豊岡 昭彦

写真／大橋 愛　Eye Ohashi

写真家。神奈川県生まれ。東京綜合写真専門学校研究科卒業。写真作品活動のほか、企業広告、雑誌、出版等の分野で活動。個展、グループ展多数。写真集『piece』、『UNCHAINED』（ともにFOIL刊）など。

2018年年頭にあたり、グローバル化した資本主義を制御するための国際的なルールづくりについて触れておきたい。

17年は自国利害中心主義を掲げるトランプ政権の登場や、英国のEU離脱などに象徴されるように、協調よりも自国優先の風潮が世界的に強まった。さらに北朝鮮、中東などで様々な政治リスクが存在していることは周知の通りだ。

こうした中、奇妙なことに経済的には世界中で好況が続いている。

17年10月にIMF（国際通貨基金）が発表した「世界経済見通し」では、17年の全世界のGDP成長率（購買力平価ベース）は3・6%、18年は3・7%と予測されている。これは15年の3・4%、16年の3・2%を超える高い成長率だ。特筆すべきは、15～16年にマイナスの成長率だったブラジル、ロシアがプラスに転換、世界のあらゆるエリアが同時好況となっていることだ。

この好調を支えているのが金融市場であることは明確だ。IT技術の進歩により、マネーゲームが肥大化し、これによって世界的に株高の状況となり、世界同時好況が生み出されている。

しかし、経済成長には、負の影響も当然のように存在する。例えば、エネルギー消費に伴ったCO$_2$排出量の増加、ヒトやモノの移動により病原菌やウイルスなどが世界的に移動すること、さらには水や食糧の枯渇、貧富の格差拡大など、様々なリスクが考えられる。

こうしたリスクは国家が単独で対応することが困難で、世界が連帯して対応していくことが必要だ。

さらに、マネーゲームに走る多くの金融企業は、国籍が定まらないことやタックスヘイブン（租税回避地）に本社があることなどを理由に税金を逃れていることが多く、グローバル化によって最も利益を得ている企業が相応の負担をしていないという不公平が生じている。こうした状況を賢く制御し、サスティナブルな発展を支えていくために広く責任を負うような新しいルールづくり、すなわち「グローバル・ガバナンス」と、それを実現する政策論が必要だ。

例えば、国境を越えて展開される経済活動に対して課税する国際連帯税が考えられるし、フランスなど14カ国で始まっている、人々の移動に課税しそれを財源にアフリカ支援などに提供される航空券連帯税なども参考になるだろう。

世界的にはそれぞれの国家が自己主張を強める傾向が続いており、全世界の賛同を得ることはなかなか難しい状況だが、日本はサスティナブルな世界をつくるという「理念」を柱に、地に足の着いた議論をすることで、世界各国に対し責任の共有を訴えていかねばならない。

（2017年11月8日取材）

Global Headline

サスティナブルな世界をつくるグローバルなルールの必要性

寺島 実郎

てらしま・じつろう

一般財団法人日本総合研究所会長、多摩大学学長。1947年、北海道生まれ。早稲田大学大学院政治学研究科修士課程修了、三井物産株式会社入社。調査部、業務部を経て、ブルッキングス研究所（在ワシントンDC）に出向。その後、米国三井物産ワシントン事務所所長、三井物産戦略研究所所長、三井物産常務執行役員を歴任。主な著書に『ユニオンジャックの矢　大英帝国のネットワーク戦略』（2017年、NHK出版）、『シルバー・デモクラシー――戦後世代の覚悟と責任』（2017年、岩波新書）、『中東・エネルギー・地政学－全体知への体験的接近』（2016年、東洋経済新報社）など多数。

「報道ライブ　INsideOUT　寺島実郎の未来先見塾～週刊寺島文庫～」（BS11、毎週金曜日夜20:59～）に出演中です。

No.52 2018 Winter Contents

GLOBAL EDGE

新春対談 “こつこつ”と積み上げるブランドの真価
高野 登　×　渡部 肇史　02

特集 変化の中でも変わらないもの

Global Vision
「礼法のこころ」を日々の内なる規範に
小笠原 清基　×　鹿内 美沙　14

Opinion File 正能 茉優
新しいワーク・ライフ・バランスで幸せを追求する　22

Opinion File 吉藤 健太朗
分身ロボットが変えていく存在伝達のコミュニケーション　26

Focus On Scene 北の高原に広がる白樺林　10

Global Headline 寺島 実郎
サスティナブルな世界をつくるグローバルなルールの必要性　13

Home of J-POWER 藤岡 陽子
ミルクとワインで町興し 挑み続ける高原の町を歩く
岩手県葛巻町とグリーンパワーくずまき風力発電所を訪ねて　30

Global J-POWER
インドネシア国の発展とともに　38

POWER PEOPLE
J-POWER茅ヶ崎研究所　40

Global Eye 日本の魅力 翻訳家・詩人・研究者・アーティスト
ピーター・J・マクミラン　42

匠の新世紀 株式会社鮒佐　43

Venus Talk アーティスト 康 夏奈　46

「音のソノリティ」を訪ね 歌人 小島 なお
糠平湖のきのこ氷　48

J-POWER NEWS　49

日当たりのいい山の斜面では日本古来の山ぶどうが栽培されている（岩手県葛巻町）。

表紙イラスト：鯰江 光二
本文デザイン：田村 嘉章、中川 まり、渡辺 美岐
制作協力：Weber Shandwick（ウェーバー・シャンドウィック）

Global Vision

「礼法のこころ」を日々の内なる規範に

鎌倉期以来の道統を受け継ぐ小笠原流。三十一世宗家嫡男である小笠原清基氏は、武家の礼法・式法を守りながら、伝統文化の変革にも一家言を持つ。その背筋の伸びた佇まいに、この国で生きていく人の「範」が映し出される。

弓馬術礼法小笠原流 三十一世宗家嫡男
小笠原 清基

×

フリーアナウンサー、日本舞踊西川流名取
鹿内 美沙

無駄を削ぎ落とした動きの美を追い求めて

鹿内　初めに弓馬術礼法小笠原流（※1）とはどのようなものか、ご紹介いただけますか。

小笠原　今から８３０年ほど前、初代小笠原長清が源頼朝公に、礼法と弓術、弓馬術の３つを教え、師範となったことから小笠原流は始まっています。以来、代々足利・徳川将軍家の指南役を務めてきました。明治維新後は古来の礼式を近代生活に適応させつつ、流鏑馬（※2）に代表される弓馬術、弓術、儀礼など伝統文化の継承、普及にあたっています。

鹿内　つまり、武家の礼法を現代に伝える家系なのですね。初代から数えて、いま何代目ですか。

小笠原　三十一世宗家の小笠原清忠が私の父です。

鹿内　次期宗家の清基さんで32代目……門外漢の私にも歴史の重みがずしりと胸に響きます。小笠原流の礼法にはどういった特徴があるのでしょう。

小笠原　鎌倉幕府が開かれた頃、文化の中心は京都でしたので、公家の礼法を参考にして武士らしく質実剛健な形に整えてきました。単に力を

誇示し民心を従わせるのではなく、人として礼節が必要だとの考え方があったと思います。

鹿内　武家の礼法には誇り高い心の持ちようだとか、「武士は食わねど高楊枝」といったやせ我慢を強いるようなイメージもありますけども。

小笠原　武家の礼法はとてもシンプルで、実用、省略、美しさの3つが基本です。戦いを本分とする以上、道理にかなった動きを常に心掛け、省けるところは極力省き、そこに美を求めていく。それができれば、相手方にも失礼が及ばないと自らを律するのです。

鹿内　単なる応接のマナーや、マニュアル的な手順などとはまったく別モノのようです。無駄を削ぎ落とした動きの美を追い求めていくような……。

小笠原　要は、日常の立ち居振る舞いで粗相が起きないためにはどう動くべきか、その考え方が重要なのです。例えば食事の作法で、食膳の左側にあるものを右手で取りに行くと、食器に触れて音を立てたり、袖口を汚したりして粗相が起きやすくなる。だから左手で取りに行く、その動作が美に映るように考え尽くされたものが礼法とお考えください。

武家の礼節はシンプル。実用、省略、美しさの3つが基本です。

鹿内　効率よく、しかも美しく動くという考え方を、弓を引く動きに応用すれば弓術になり、さらに馬に乗る動作まで含めれば弓馬術になる、という理解でよろしいでしょうか。

小笠原　おっしゃる通りです。小笠原流では、実用、省略、美を重んじる礼法をベースにして、その上に弓術、弓馬術といった武家の式法を位置づけています。

立つ、座る、歩くなど6つの基本体を修める

鹿内　私の日本舞踊の習い始めは、舞扇子をどう開くかばかり教わりました。小笠原流では何から習うのですか。

小笠原　立ち方、座り方、歩き方、おじぎの仕方、物の持ち方、回り方といった基本体を修めていただきます。日常の動作はそれら6つの組み合わせですので、例えば食事作法で腕の運びや箸使いは良くても、猫背であっては美が損なわれますから、まずは基本の姿勢から稽古するという指導になります。

鹿内　おじぎの仕方なども難しいですよね。時と場所に応じて深さを変えなければならないとか。

小笠原　実は、屈体の角度はあまり本質的な問題ではありません。それより多くの方が頭を下げるのはゆっくりでも、起こすのが早すぎるので、呼吸のリズムを相手に合わせてゆっくりした動作を心掛けると、より気持ちが通じます。もう1つ、おじぎの動作の一部始終をどのタイミングで写真に撮っても、ちゃんと絵になっていることも重要ですね。

鹿内　日舞でも同じように教わりました。動きの点と点を結んだ線が美しくなるように舞いなさいと。礼法と聞いて、自分とはかけ離れた世界かと思っていましたが、実は日常の動作を改めて考え直してみることなのですね。

小笠原　家庭のしつけと同じで、私たちがお教えするのは日本人としてごくあたり前のことばかりです。それができなくなっている自分に気が付いて、礼法を習いに来られる方が多いのではないでしょうか。

鹿内　実際に通って来られる方々に特徴はありますか。

小笠原　下は未就学児から上は80代の方まで幅広く、きっかけや動機も様々です。最近は、お子さんのうちからの修身にとか、グローバル社会で日本文化を語れる人間教育のためにといった動機が目立ちます。海外の方からのオファーで、日本の伝統文化として紹介される情報が玉石混

応接のマナーとかマニュアル的な手順とはまったく別モノですね。

鹿内 美沙（しかない・みさ）
2007年、中京テレビ放送に入社。09年に第30回NNSアナウンス大賞で最優秀新人賞受賞。13年に同社退職後はフリーアナウンサーとして活躍。趣味・特技は日本舞踊（西川流名取＝西川扇華子）、乗馬。

Global Vision
Ogasawara Kiyomoto × Shikanai Misa

Keyword

※1 **弓馬術礼法小笠原流**
小笠原家は初代長清に始まる清和源氏の家系。その子孫によって道統が継がれ、後醍醐天皇に仕えた7代貞宗、常興が「修身論」「体用論」を著して流儀を確立。20代貞政は8代将軍吉宗の命により新儀式としての流鏑馬を制定。28代小笠原清務は流鏑馬を天覧に供すほか、明治12年8月、東京神田に弓馬術礼法小笠原教場を開き、門戸を一般に公開した。

※2 **流鏑馬神事**
地上で弓を引く歩射に対し、馬上から弓を引く騎射の儀式として確立。国家安穏、五穀豊穣、病気平癒などを祈願する神事として広く定着した。小笠原流は鶴岡八幡宮、日光東照宮、笠間稲荷神社などの他、海外でも執行している。

小笠原 清基（おがさわら・きよもと）
弓馬術礼法小笠原流 三十一世宗家嫡男。1980年、小笠原流三十一世宗家小笠原清忠の長男に生まれる。3歳で弓馬の稽古を始め、小学5年から鎌倉・鶴岡八幡宮など全国各地の流鏑馬神事で射手を務める。大阪大学基礎工学部卒業後、筑波大学大学院人間総合科学研究科修了（神経科学博士）。製薬会社に研究員として勤務の傍ら、全国の門人らと各地で神事を執行している。NPO法人小笠原流・小笠原教場理事長。一般社団法人日本文化継承者協会代表理事。日本女子体育大学弓道部監督。

「お教えするのは日本人としてあたり前のことばかりなのです。」

交なので、どれが正しいのか整理してほしいと頼まれることもあります。

礼法をベースに弓術、弓馬術を武家の式法に

鹿内　そうした礼法をクリアして、弓術や弓馬術へと進む方もおられるのですね。私は乗馬も好きなので興味を引かれます。

小笠原　弓はもともと狩猟の道具であり、戦の武器であったわけですが、それを武家の式法に仕立てたのが小笠原流弓術です。正月の破魔矢（はまや）なども、大的式（おおまとしき）という弓術の儀式が元になっています。一方の弓馬術は、各地で行われる勇壮華麗な流鏑馬の神事をニュース画像などでご覧になることが多いと思います。

鹿内　実際に馬にまたがった自分を想像してみても、疾走する馬上で手綱も持たず、大きな弓を引いて横向きに的を射るなんて人間業とは思えません。一体どれだけ過酷な訓練を積めば、あんなアクロバティックな動きが身に付くのでしょう。

小笠原　むろん弓術を修めてからの話になりますが、馬の乗り方はほとんど教えません。やはり先程申し上げた、立つ、座る、歩くといった礼法をとことん稽古してもらいます。その中で現代人の多くが失っている、人間が本来備えているべき身体の中心の筋力を取り戻します。すると落馬をしても、多少のことではへこたれない身体をつくれるのです。

鹿内　礼法の稽古で、いわゆるインナーマッスルを鍛えるのですか。

小笠原　身体の左右の中心で、なおかつ上下の中心といえば腰しかありません。立ち姿から稽古を積み重ねて、腰を正しく使う動き方とか、余分な力を入れずに動く方法が身に付くと、馬上でどんな姿勢を取っても身体の傾きを補正して安定を保てるようになります。

鹿内　その域に達したら、実際の馬に乗って仕上げにかかると……。

小笠原　いえ、稽古の大半は木製の馬で行います。昨今は馬の頭数にも限りがありますし、儀式では初騎乗の馬を操ることも多く、どんな馬にも対応しうる基本を身に付けるには、むしろ木馬が適しているのです。

　初心者のうちこそ、木馬と生き馬ではまったく条件が違うと感じますが、熟練・熟達するほど不思議なくらい感覚が似通ってきます。

鹿内　動かぬ木馬にまたがって疾走する馬上のバランス感覚が養えるなんて、にわかには信じがたい気もします。

小笠原　日舞にも「静中動、動中静」がありますでしょう。ピタッと止まった中に大胆な動きがあり、激しく動く中にシンとした静けさがある。要は、いかなる状況下でも正しく引けば当たる「正射必中」の極意を会得することなのです。

「流儀を教えることを生業としない」との家訓

鹿内　普段の暮らしぶりをお尋ねしたいのですが、次期宗家として流派の矢面に立たれる一方、清基さんは製薬会社に勤務する研究者としての顔もお持ちです。両方を立てるのは難しくないですか。

小笠原　ありがたいことに研究職なので勤務時間に融通が利くのと、会社や職場の方々の理解があればこそ今の生活を維持できています。

鹿内　家業を継ぐために今の職業を選ばれたと聞きましたが、本当はお医者様になりたかったとか。

小笠原　はい。小さい頃から流派内の幅広い年代の方々と接して、病気や死を身近に感じていたことから医者の職分に憧れたのも自然な流れかと思います。ところが、門人で医師をしている方に聞くと「次期宗家のあなたに両立は不可能」と即断され、せめて医療に近い仕事に就きたいと願って現職を得るに至りました。

鹿内　職場と教場とで、ご自身の立ち居振る舞いを使い分けるようなことはありますか。

小笠原　特に意識してはいませんけども、教場にいる間は礼法に則った動きをしますが、勤務先では周りの方々とあまり変わらないと思います。さもないと浮きますから（笑）。

鹿内　流派でのお立場を考えれば、あえて就職の必要はないとする価値観もあるかと思うのですが。

小笠原　その考えを退けたのが二十八世宗家の小笠原清務で、明治維新を機に「流儀を教えることを生業としない」との家訓を残しました。それ以前の固定的な身分制度から平等な世の中に様変わりして、各家庭のしつけも垣根を越えて行われるようになった。そこに近代にふさわしい礼法教育の可能性も開けたのですが、それをビジネスにしてしまえば

「礼法と聞いて、自分とはかけ離れた世界かと思っていました。」

Global Vision
Ogasawara Kiyomoto × Shikanai Misa

礼法の稽古場に掲げられた小笠原教場心得。築 50 年余の建物は伊勢神宮と日光東照宮のご神木を材とする。

「伝統文化の全体観が身に付くような教養科目があって然るべきです。」

顧客の確保を意図した流儀にねじ曲がりかねませんから、決して生業とせずという選択をしたのだと思います。

鹿内　そういう志の高さを代々継いでいこうとする覚悟の表れなのですね。

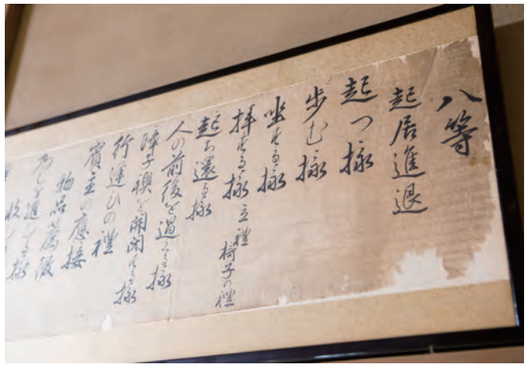
小笠原　祖父は大学で教育心理学を教えましたし、父も福祉関係の団体職員や教職を務めました。流派の仕事との二足のわらじが、どうにか様になってきたかと思います。

変えていくべきものと変えてはならないもの

鹿内　家庭のしつけはもとより、学校教育や生涯教育などの場でも「礼法のこころ」をもっと生かせば良いのにと思います。

小笠原　どんな分野、どこの流派といった括りを離れて、日本の伝統文化の全体観が身に付くような教養科目があって然るべきだとは思います。

木馬にまたがり腰を浮かせた姿勢から弓を引く稽古。熟達すると生き馬と変わらぬ感覚が得られるという。



小笠原流礼法で稽古をする項目の一覧。右から起つ様、歩む様、坐する様などと順を追って記されている。

Global Vision
Ogasawara Kiyomoto × Shikanai Misa

例えば、なぜ正月には餅を食べて初詣に行くのか、七五三や結婚式など人生の通過儀礼がなぜ大切なのか。大本の意味を知らずに過ごせば伝統的風習の形骸化をくい止めることができません。

鹿内　この国に生きる上での心得として、社会科で歴史を習うのと同様に、文化についても学ぶ機会が必要なのですね。

小笠原　伝統文化は限られた人のためにある特殊な世界ではありません。興味を持たれた方が好きな分野、好みの流派の門をたたけば誰でも受け入れてくれるはずです。

　ただ1つ、我々受け入れる側の反省として、分野ごと、流派ごとに閉じこもって外部との交流を許さないという風儀があることには大いに改善の余地があります。

鹿内　家元制をとる日舞の世界にも、その傾向は見て取れます。

小笠原　理想を言うなら、日本の伝統文化という大枠の中で各分野、各流派が横のつながりを持ち、互いに協力できるところは協力して伝統文化全体への関心を高め、お弟子さんを紹介し合うことは心掛けるべきでしょう。日舞を嗜まれ、乗馬もなさる鹿内さんには流派の壁を突破する先駆けとして、ぜひ弓馬術をお勧めしたいくらいです。

鹿内　ケガをすると仕事ができないので、少し考えさせてください（笑）。小笠原流においては、もしもお弟子さんが他分野、他流派の門弟を兼ねたとしても、お咎めはないのですか。

小笠原　咎めるどころか奨励しています。私自身、子供の頃から剣道の道場に通い、お茶、お花、お香なども習いました。弓術では、小笠原流とは別に日置流がありますが、あちらの道具をあえて使ってみて、相違点に気づく稽古をした時期もあります。ただし、それで小笠原流の式法を変えることはせず、何か足りない部分を補ってもらうような感覚ですね。

鹿内　なるほど。変えていくべきもの、変えてはならないものの境目がその辺りにありそうです。次期宗家として、先々への歩みをどう思い描いていらっしゃいますか。

小笠原　やはり日本文化を後世に正しく伝えていくことが何よりの使命で、幾久しく小笠原流はその主たる担い手であり続けたいと思います。

「歴史を習うのと同様に文化についても学ぶ機会が必要なのですね。」

構成・文／内田 孝　写真／吉田 敬

新しいワーク・ライフ・バランスで幸せを追求する

正能 茉優
株式会社ハピキラFACTORY
代表取締役社長
ソニー株式会社　商品企画担当

自分らしい生き方と時間配分を考える

学生時代に友人と「ハピキラFACTORY（以降、ハピキラ）」を起業した正能茉優さん。大学卒業後は、ハピキラの社長業を続けながら企業の社員として働く道を選び、現在はソニー株式会社に勤務している。その働き方は「パラレル・キャリア（複業）」と呼ばれ、今注目を浴びている。

一企業に属する正社員が、他の仕事で社長業を兼務する――。その新しい生き方、働き方に、違和感を抱く向きも多いだろう。「働く＝自分の所属する会社で一生懸命仕事し、貢献すること」が当然という多くの人にとって、理解は難しいかもしれない。

しかし、今どきの20代、それも真剣に自分の生き方を考えている若者の中には、違う価値観を持っている者が現れている。正能さんは、自分の生き方、時間の使い方についてこう語る。

「自分にとって、どう働くのが幸せか。私にとってはソニーでの仕事も大事、学生時代に起業したハピキラも大事なのです。もちろん、家族や友だち付き合いなど、仕事以外の要素も同様に大切にしたいと思っています」

正能さんは、自分なりの人生配分表をつくっている。それによると、ソニーの仕事は30％、自身が社長を務めるハピキラの仕事も30％、家族7％、恋愛7％、昔からの友人6％、仕事上の人脈づくり5％、それ以外は個人的な趣味などに充てると決めている。

「例えば、私の中でソニーの仕事は30％とすると、1週間あたりこれくらいの時間を使えるということが明白になります。それをもとに、スケジュールを管理していきます」

複業しながら、プライベートの時間も大切にする。正能さんは、それを実現するために

ハピキラは、学生時代の友人・山本峰華さん（前列右）とともに2人で起業。

は、自分が持つ時間の価値を最大限高めることが必要だと語る。

「自分の1時間あたりの価値を最大限高めて利用するには、自分は得意なことや好きなことをやり、苦手なことはアウトソーシングするのがよいと考えています」

正能さんが苦手なのは、洗濯と領収書の整理。どちらもアウトソーシングすることで、浮いた時間を有効に使っていく。

「モタモタと洗濯をしている時間や、領収書の整理に戸惑っている時間を考えると、お金で解決したほうがずっと効率的です。もちろん、お金はかかりますが、例えば、税理士さんに領収書の管理をお願いするお金を、自分の得意なことや好きなことで稼ぐと思えば、仕事を頑張れるし、効率だっていいと思います。不得意なことに延々と時間を使うより、そのほうが効率がよいと思います」

「したいことだから、好きだから」が行動の基本。ソニーの仕事もハピキラの仕事も楽しいという。

互いに響き合う2つの「正業」

本当は、得意なことだけをやっていたいが、それでは自分の幅が広がらないため、好きなこと、おもしろいと思うことにも積極的に挑戦するという正能さん。今、興味があるのは、それまでほとんど関心がなかったテクノロジーの分野だ。

「ソニーに入社して、AIや様々なテクノロジーなどについて教わったり、関係者に会ったりしたことで刺激を受け、興味が湧いてきました」

ソニーでは「こんな体験を実現したい、お客様に届けたい」という想いと、社内に眠っている技術をかけ合わせて、商品開発に取り組んでいる。長年、ソニーが培ってきた技術や基礎研究などをもとに、どういうコンセプトで、誰に向け、どういう商品をつくるか――。その仕事には、自身の会社「ハピキラ」の経験が大いに役立っている。

正能さん曰く、「ハピキラは、地方のすぐれた商品をかわいくプロデュースして、都会の若者に届ける会社」。地方の商品を発掘し、商品としてのコンセプトを考え、ターゲットを絞り、販路を切り拓く。

「どこで売るか、つまり販路の獲得という前提がある上で、誰に売るか、そのためにはどういう商品をつくるのかという順序でものを考えていかないと、行き詰まってしまいます。それは、ハピキラの仕事を通じて、身をもって知りました」

価値の発掘、再定義、販路の開拓、宣伝PR……。「つくる・広める・売る」を、自らの手で行ってきたからこそ、採算ベースに乗せるまでの時間や資金を予測したり、販路の開拓の仕方やPRのタイミングなどを考えたりする力が身についたという。

現在、ハピキラでは、「MY農家BOX」という事業に取り組んでいる。旬のおいしいフルーツを食べたい若者と、販路を開拓したい農家を直接結ぶシステムである。

「もともと、ハピキラではお菓子やお酒などを扱ってきました。でも、1次産品（加工されていない農林水産物）ときちんと向き合わない限り、地方経済は元気になりません。『MY農家BOX』では、1万円を払うと、年に3回、旬のおいしいフルーツが農家から届きます。そこには、農家のフェイスブックやLINEなどのIDを添えています。どうぞ農家と直接やりとりしてください、仲良くなってくださいという気持ちを込めています。若者と農家の仲人をしているような感じですね」

なぜ、フルーツを選んだのか。

「野菜とは違い、フルーツなら料理が苦手な人でも調理せずにすぐに食べられ、友だちや同僚などにプレゼントしやすいからです。今後は、『MY漁師BOX』、『MY酪農家BOX』など、様々な分野に展開していくことも考えています」

ソニーでの仕事とハピキラの事業。正能さんの中では、どちらかが正業でどちらかが副業というわけではなく、それぞれの仕事での経験や刺激が、「正能茉優」というビジネスパーソンをつくりあげているのだ。

周囲とのコミュニケーションが自分らしい働き方を支えるカギ

自分の生き方を堂々と主張する正能さん。しかし、当然ながら、そんな彼女には風当たりも強い。「どうして、そんな働き方をするんだ」と批判されたり、怒られたりすることもある。

「最初は、なぜ分かってもらえないんだろう、古い考えに縛られている人たちだなあと思っていました」

周囲の人との仕事観、人生観の違いを認めてほしいという思いから、「私を違う国の人間だと思ってください」と訴えたこともある。

しかし、歴史を見ると、文化や習慣の違いから、もめごとがおこるケースは多い。そして、深刻に対立するか、理解し合うか、どちらかの道を歩むことになる。

正能さんが選んだのはもちろん理解し合うほうの道だった。では、そのために、どうすべきか。

正能さんは対話が必要と考え、これまでのように「自分を理解してくれない」と相手を一方的に責めないと心に決めた。

「変化を嫌う相手にも、相手の考え方があり、価値観があります。それを批判するのではなく、こちらの気持ちや考え、私の価値観を説明しなければ、永遠に分かり合えないと気付きました。私は、ソニーで片手間に働いているわけではありません。周囲の皆さんと同じように、ソニーの仕事は自分にとって大事であることを伝え、行動で示していかなければならないと思っています」

今、正能さんは、周りに理解を求めて対話し、スタッフと一緒にランチに出かけるなど、日頃から周りとのコミュニケーションを大切にしている。ハピキラで得た人脈をソニーの仕事仲間に快く提供もする。

「困っている人がいた時、自分が力になれそうなら貢献したいし、自分が持っている人脈やノウハウは、自分のためだけではなく、ほかの人のために使いたいなと思っています」

正能さんのパラレル・キャリアを下支えしているのは、どんな分野の仕事においても大切なコミュニケーション力なのだ。

「私は、走りながら考えるタイプ。考えきってから動くことが苦手です。でも、商品開発の現場では、コンセプトをじっくり比較検討して考える作業が必要な場合も多いんです。様々な考えや能力を持つ社員がいる中で刺激を受けながら、周りへの感謝の気持ちを忘れずに働いていきたいと思っています」

今後、変化があっても人生に満足していたい

正能さんは、パラレル・キャリアという生き方を他の人にも勧めたいとは考えていない。人によっては過労死につながる場合もあるだろうし、周りとの軋轢に耐えられない場合もあるかもしれない。

そもそも、これまでの会社員のように1つの仕事に専念する働き方であれ、複(副)業を持つ働き方であれ、その人が選んだ働き方を尊重すべきだと考えている。

「私の父は、いわゆるモーレツ社員で、1つの会社で仕事に専念し、プライベートよりも仕事を優先するような働き方をしてきました。母はそんな父を支え、家庭を守る専業主婦です。私の働き方や生き方は、父や母のスタイルとは違うけれど、彼らの生き方を否定するつもりはありません。それも1つの選択だなと思います」

大切なのは、自分が何をしたいのかだという正能さん。自分なりの幸せと成功を定義すべきだと提言する。

「私は『ビュッフェ・キャリア』と呼んでいるのですが、ホテルのビュッフェのように、好きなものを、好きなだけ、好きなバランスで食べるのが幸せの基本だと思います。今は、2つの仕事、家族や友だちとの時間、趣味の時間など、自分の中のバランスが大切。巨万の富を築きたいとか、ハピキラを上場するような大きな会社にしたいとか、そんな『成功』は求めていません」

講師として、起業体験から得た知識やビジネスの方法論を話す正能さん。人材育成は、今、気になっていることの1つ。

自身のライフ・ワーク・バランスは満足度100%だという。今後の仕事における目標は、ソニーでは「もう一度『世界のソニー』と呼ばれるような、画期的で世界に誇れる商品をつくること」、ハピキラでは「人材を育てるための枠組みをつくること」だ。

ただし、結婚や出産、子育てなどのこれからのライフステージによって、自分自身のやりたい仕事や好きなことも変わっていくだろうとも思っている。そうした変化は当たり前のこととして受け止めるが、「自分がどうしたいか、どうしたら満足のいく生き方ができるのか」という視点は、ずっと持ち続けていたいという。

1泊2日の慶應義塾大学の研究プロジェクトに、「先生」として参加。学生との交流は、新しい刺激になった。

「最近、3つ目の『やりたいこと』を見つけました。母校である慶應義塾大学の研究プロジェクトをつくっているのですが、教育っておもしろいなと気づいたのです。こちらの知識を教える、授業をするというより、学生と一緒にプロジェクトを回していくという感じですが、なかなか自分の想定を超える場になるので面白いです」

持ち前の前向きな考え方とひたむきさに、しなやかさを加えて、正能さんはイキイキと自分の人生を生きていく。

終身雇用が崩れ、働き方改革が叫ばれる中、幸せとは何か。確固たる信念を持って生きる彼女のように、いま一度、自分の価値観を見直し、働き方や生き方を考えたいものだ。

取材・文／ひだい ますみ　写真／竹見 脩吾

しょうのう・まゆ

1991年、東京都生まれ。慶應義塾大学在学中の2012年、地方の商材をかわいくプロデュースし発信する株式会社ハピキラFACTORYとしての活動を開始。大学卒業後は、広告代理店に就職。現在は、ソニー株式会社で新規事業・新規商品の開発に携わる一方で、ハピキラFACTORYの経営も行う。経済産業省「兼業・副業を通じた創業・新事業創出に関する研究会」の委員や、北海道天塩町「政策アドバイザー」なども務める。慶應義塾大学SFC研究所上席所員。

分身ロボットが変えていく存在伝達のコミュニケーション

吉藤 健太朗
株式会社オリィ研究所
代表取締役所長

病室から世界をひらくOriHimeという分身

東京・府中の榊原記念病院にはときおり、小児病棟を訪れるサッカー選手の姿がある。スポーツがしたくてもできない、試合の観戦に出掛けることも叶わない。もしかしたら、このままずっと病室から出られないのかも。そんな不安を抱えた子どもたちと束の間でも言葉を交わし、楽しいひとときを過ごして、少しでも元気になってもらえたなら。近隣に本拠地を置くFC東京の選手たちが、病院と協力して活動を重ねてきた。

この秋、そこにもう一人の協力者が現れた。「身代わりロボット」と病院が呼ぶ、小型分身ロボット「OriHime（オリヒメ）」である。カメラとマイク、スピーカーを備え、Wi-Fiでインターネットに接続可能。遠く離れた場所にあるパソコンやスマートフォンに、映像や音声をリアルタイムに送ることができる。また逆に、それを受け取った人が遠隔操作でOriHimeから自分の声を伝え、小さな腕を動かしたり顔の向きを変えたりして、意思や感情を表すこともできる。

身長約20㎝、体重約600g。手のひらにも乗せられるこのミニロボットなら、「身代わり」としてスタジアムに連れて行くのは簡単だ。たとえ本人は病室にいても、会場にいるサポーターと一緒になって歓声を上げたり声を掛け合ったりして、ゲームを楽しんでもらえるのではないか。

FC東京のアイデアに病院も賛同。長く入院中の高校生にまず使ってもらおうと、その兄と弟がOriHimeを抱いて試合会場へ。ゴール裏の熱狂や売店の喧噪も伝えながら、最後まで観戦。途中、OriHimeが拍手をして喜ぶ場面もあり、病室では高校生が、入院以来聞いたことがないほどの大きな声を上げていたという。試合後、兄弟は「3人でスタジアムにいるようだった」と語った。

この様子を伝えた榊原記念病院のウェブサイトには、「外に出られなかったり、動けない患者さんの身近なところまでロボットが追ってきていると実感させられました」とある。「まさにそのために、OriHimeは誕生しました」

と、株式会社オリィ研究所所長でロボットコミュニケーターの吉藤健太朗さんは話す。OriHimeの生みの親だ。

「たとえ病気や身体的な理由で行きたい場所に行けない人でも、会いたい人に会い、社会に参加し、世界を広げ、誰かに必要とされて、死ぬ間際まで生きがいを感じられる社会。それを実現するための、身体が運べなくても心を運ぶ移動手段」

それが、分身ロボットの開発コンセプトであるという。

その根底には、自身の体験に基づく「孤独の解消」という大きなテーマがあった。

人と人をつなぐロボットで社会から孤独を消していく

吉藤さんは11歳から14歳までの長い間、過度のストレスによる精神的・肉体的な衰えに苦しみ、ほとんど学校に通うことができなかった。1日の大半を布団の上で過ごし、誰とも話すことのない毎日。1週間ずっと天井だけを眺め続ける極限状態の中で押し寄せる苦痛。吉藤さんはそのときの心境を、著書『「孤独」は消せる。』にこう綴っている。

――誰かと話したいけれど、嫌われ、傷つき、劣等感を感じることが怖くて、人と会えない。（中略）自分を必要としてくれる人なんて誰もいない、むしろ生きていることが迷惑なのではないかという気持ちが強まり、さらにネガティブになって人を遠ざける負のスパイラルに陥っていた――

それをひと言で表せば、「孤独感」となる。一人でいることが好きな人は大勢いるし、誰でも一人になりたい時はある。だが、本当の孤独とは、「誰ともつながりを感じられず、この世界に自分の居場所はないと思ってしまう状態」だと吉藤さんは言う。幸い、周囲の粘り強いサポートもあって吉藤さんは苦境を脱したが、「もう誰にも、自分と同じ体験はしてほしくない」と思った。

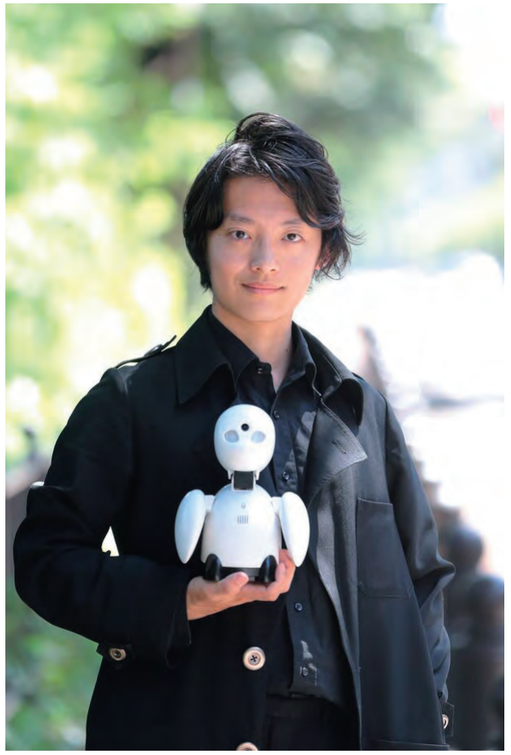
不登校に限らず、病気や障害、怪我のために自由に身体を動かせない、精神的な理由で環境になじめない、育児や介護に追われて時間が取れないなど、様々な要因で孤独感にさいなまれている人たちがたくさんいる。ならば、その孤独を解消する方法を研究したい。それが吉藤さんの、ロボット開発のモチベーションへとつながっていく。

「高専時代に人工知能の研究をして、話し相手になってくれる友だちロボットをつくろうと考えました。そうすれば、孤独感が癒やされるだろうと。そんなロボットが近くにいたら上げていたという。試合後、兄弟は「3人でスタジアムにいるようだった」と語った。

この様子を伝えた榊原記念病院のウェブサイトには、「外に出られなかったり、動けない患者さんの身近なところまでロボットが追ってきていると実感させられました」とある。「まさにそのために、OriHimeは誕生しました」

と、株式会社オリィ研究所所長でロボットコミュニケーターの吉藤健太朗さんは話す。OriHimeの生みの親だ。

「たとえ病気や身体的な理由で行きたい場所に行けない人でも、会いたい人に会い、社会に参加し、世界を広げ、誰かに必要とされて、死ぬ間際まで生きがいを感じられる社会。そ



「人工知能が人を癒やしている未来よりも、親しい人同士がつながり、孤独でなくなる未来をつくりたい」と語る吉藤さん。

離れた場所にいる人の分身となり、遠隔操作によるコミュニケーションを可能にするロボット「OriHime」。

ら、自分もあの頃あんなに苦しまずに済んだかもしれないと思えたのです」

ところが、やがてそれは求めているものとは違うことに気づく。確かに、自分を理解し慰めてくれるロボットがいれば、心の傷は癒やされるかもしれない。だが、ロボットは人間ではない。「誰ともつながっていない」ことに深く根を張る孤独の連鎖は、「人とつながる」ことでしか断ち切れないのではないか。必要なのは孤独への癒やしではなく、リアルな人間関係による孤独の解消なのだ。

「ロボットと人ではなく、人と人をつなぐロボットをつくろうと決めました」

人間同士のコミュニケーションを支援することを目的に、その道具としてのロボットを創造する。吉藤さんが自身の職業を「ロボットコミュニケーター」と呼ぶ所以である。

人工知能は必要ない 生身の心が人間関係をつくる

日本は世界の産業用ロボット稼働台数（※1）の約18％を占めるロボット先進国である（2015年／日本ロボット工業会調べ）。わけても人型ロボット、いわゆるヒューマノイド（※2）の開発では世界のトップランナーと言っていい。その専門家たちは、ロボットを限りなく人間に近づけることを目指し、手足の機能や感覚、表情、そして高度な知能の獲得に向けて研究を重ねている。それらを備えたヒューマノイドは、例えば医療や介護、災害救助のアシストに、あるいは職場の働き手としての役割に期待されている。

一方、吉藤さんのＯｒｉＨｉｍｅは、人型ではあるが、半身で小さく、目はあるが口や鼻はなく、能面のように無表情で、腕はどことなく翼のよう。そして、人工知能は搭載されていない。敢えてそうしたのはなぜか。

「私がつくりたかったのは『もう一人の自分』であって、人にそっくりな別の誰かではないんです。子どもにもお年寄りにも、誰にでも使ってもらうには、誰にも似ていないほうが違和感がないし、背格好や顔かたちといった情報はむしろ邪魔になる。その余計な情報を、いかに排除するかを考えました。

人間というのは、相手の様子を想像して愉しむことができる生き物です。遠く離れた家族と電話で話しているとき、受話器の向こうの笑顔を思い描いてしまうことはありませんか？　そこには確かに本人がいます。逆に、本人が自分の姿を見せたくないこともある。病室で寝たきりの人は、ベッドに縛りつけられた有様なんて見せたくない。元気に笑う自分を想像してくれたほうがいいんです」

だから、ＯｒｉＨｉｍｅには操作する本人を映すモニターは付いていない。同じように人工知能を排除したのは、ロボット自身が状況を勝手に判断して、本人のそれとは必ずしも一致しない動作や意思を示してしまうミスマッチを避けるため。それは本人でも分身でもなく、ただの代理人である。

［OriHimeの感情表現］

顔のデザインは能面をモチーフに、喜怒哀楽のどんな表情にも見えるよう工夫を凝らした。

登録されている10のモーションと自由に動かせる腕の動きで、様々な感情表現が可能。

挙手や拍手などの身体表現が可能。動作はパントマイムや演劇の技法に学んだ。

上下左右に首を動かし、周囲を見渡す。声が出せなくても、頷いたりして意思を伝えることができる。

※1 **産業用ロボット稼働台数**
2015年における世界の産業用ロボット稼働台数は163万1,650台。うち日本は28万6,554台（17.6％）で第1位。2位は中国の25万6,463台。出典：一般社団法人日本ロボット工業会

※2 **ヒューマノイド**
人間に近い外観を持つ生命体やロボット。人間に似せた二足歩行ロボットなど。

では、分身であるＯｒｉＨｉｍｅはどのようにして、本人の意思や感情を伝えることができるのか。その仕掛けの1つが、見る人の心持ちや角度によって喜怒哀楽様々に変化する「能面」であり、パントマイムの研究に基づき、小振りながら必要にして十分な感情表現を可能にした「腕」である。

テクノロジーの力で 不可能を可能に変えていく

孤独を解消するために吉藤さんが目指しているもの、それはつまり情報ではなく「存在そのものの伝達」であり、その手段としての「距離を克服するデバイス」の開発である。

東京本社とシンガポールを結び、現地子会社の社長がOriHimeで本社に毎日出勤。距離を感じさせないテレワークが実現（株式会社リバネス）。

長期入院中の子どもたちがOriHimeを遠隔操作して学校の授業に出席。友だちともおしゃべりを楽しみ、入院のストレスも軽減（東京都立光明特別支援学校）。

前掲の著書によれば、その意図はこうだ。

――分身ロボットで、自分が「そこに行っている」という感覚と、周囲の人も「そこに来ている」という感覚がつくれれば、それは「行った」と言えるのではないだろうか。（中略）その人がそこへ「行った」という事実があれば、身体を物理的に運んだかどうかは重要ではなくなる――

「コミュニケーションはリアクションだ」と吉藤さんは言う。たとえその場にいなくても、自分の働きかけに対して、無視されずにきちんと相手をしてもらえること。それには、電子メールやテレビ電話でただ情報を伝え合うだけでは不十分。むしろ言葉を交わしていない時間に漂う空気感や、特に必要とも言えないような無駄話、同じ時間をともに過ごしたと思える一体感、それら日常の感覚が共有されたとき、「存在」が距離を超えていく。

あるフリースクールでは、対面ストレスに悩む不登校の生徒がＯｒｉＨｉｍｅで徐々に友だちをつくり、「会いたい」のひと言で半年後に復帰を遂げた。全身の筋肉が衰えていく難病ＡＬＳ（※3）を患うノルウェーの男性は、人工呼吸器を付けた身体で病室からＯｒｉＨｉｍｅを操り、妻と幼い娘が待つ自宅で家族の時間を楽しんでいる。最近では、育児中の在宅勤務や、単身赴任中の家族との団らん、出張先からの会議参加などに利用する企業も増えてきたという。

「人は誰かに必要とされたい。必要としてくれる人がいて、必要とする人がいる限り、人は生きていける。そのために、テクノロジーの力で、今までの不可能を可能に変えていく。それがオリィ研究所のミッションです」

取材・文／松岡 一郎

よしふじ・けんたろう
株式会社オリィ研究所代表取締役所長。1987年、奈良県生まれ。小学5年生から中学2年生まで不登校を経験。工業高校では電動車椅子の新機構を発明し、ＪＳＥＣ（高校生科学技術チャレンジ）で文部科学大臣賞受賞、世界最大の科学コンテストIntel ISEFでGrand Award 3rdに輝く。高等専門学校での人工知能の研究を経て、早稲田大学に進学。分身ロボットの研究開発に取り組み、2012年より現職。青年版国民栄誉賞「人間力大賞」受賞、スタンフォード大学E-bootCamp日本代表、米国フォーブス誌「30 Under 30 2016 Asia」に選出されるなど各方面で活躍。近著に『孤独』は消える。』（2017年、サンマーク出版）がある。

※3 **ALS**
Amyotrophic lateral sclerosis。筋萎縮性側索硬化症。全身の運動神経が冒され、筋肉が少しずつ動かなくなっていく難病。

HOME of J-POWER

ミルクとワインで町興し 挑み続ける高原の町を歩く

～岩手県葛巻町とグリーンパワーくずまき風力発電所を訪ねて～

くずまき高原牧場で悠々と草を食む牛たち。350haもの広い敷地でゆったりと育てられている。

グリーンパワーくずまき風力発電所は岩手県岩手郡葛巻（くずまき）町にある。総人口6000人余りの山間の小さな町ながら、年間約50万人の来訪者を誇る「ミルクとワインの町」を知る旅に出た。

作家　藤岡陽子／写真家　大橋　愛

寒冷地という逆境が酪農郷への第一歩に

盛岡市内を出発しておよそ1時間。山あいの道を上ってきた車が、くずまき高原牧場に到着した。

視界いっぱいに広がる大草原の敷地はなんと350ha。飼われている牛の数は約2500頭、羊や山羊の姿も見える。

青々と続く牧草地。その斜面で牛たちが草を食むのを眺めながら、思いきり深呼吸した。

目を閉じれば草が揺れるサラサラという音が聞こえてくる。

なんて、いい気持ちなんだろう。

ここへ来てまだ数分しか経っていないのに、体のすみずみまで透明なエネルギーが満ちていくのがわかる。

かつてこの辺りは宿場町として栄えたという。三陸産の海産物や塩を盛岡や秋田に運ぶ〝塩の道〟でもあった。だが冷湿な風、山背（やませ）の通り道であり、冷害地帯となる厳しい自然環境は米作や畑作に適さず、土地の人は苦労を重ねてきた。

そしてそんな逆境から暮らしを守るために始まったのが、酪農だ。

明治25年にホルスタイン種を導入して牛飼いを始め、それが「東北一の酪農郷」と呼ばれる町の礎になったとされる。

30万本の白樺の群生信仰の場であった七滝

町の歴史を胸に刻みつつ、いくつかの観光スポットを散策した。

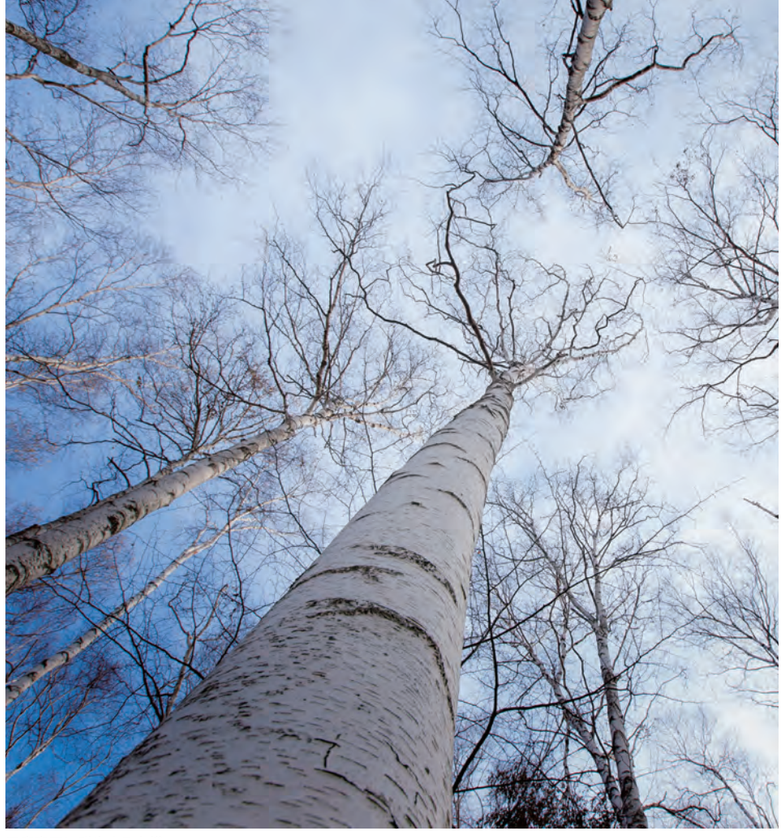
初めに向かった先は日本最大級と名高い、平庭高原の白樺林。約30万本の白樺の木が群れになってそそり立つ様子はあまりに幻想的で、しばし言葉を忘れてしまう。

パシパシと落ち葉を踏みながら森の中へと入っていく。空に伸びる細い枝が、青空に繊細な模様を描き、淡い光が白い幹に乱反射していた。レース編みの中にいるような光景に心が浮き立ち、ささいな悩みが一気に吹き飛んでいく。

さらに町の北部へと車で移動す

藤岡　陽子　ふじおか　ようこ
報知新聞社にスポーツ記者として勤務した後、タンザニアに留学。帰国後、看護師資格を取得。2009年『いつまでも白い羽根』で作家に。最新作は『満天のゴール』。その他の著書に『海路』『トライアウト』『手のひらの音符』がある。京都在住。

かつては信仰の場でもあった七滝。



平庭高原に群生する白樺。

岩手県最高峰の岩手山。

れば、「七滝」という段々に連なっていく滝があると聞いた。

遊歩道の手前にある駐車場に車を停めて、川に沿って歩いていくと空気が少しひんやりしてくる。

水が跳ね、ほとばしり、落ちる音。川の流れに逆らって1つ目の滝、2つ目の滝と足を進め、行き止まりになったところで落差43mの大きな滝が現れた。

古くは信仰の場所として参拝客で賑わっていたというが、いまは人知れずひっそりと在る七滝。

小さな祠や地元の人の手によってきれいに掃き清められた東屋だけが、突然の来訪者を出迎えてくれた。

高原牧場の始まり
酪農に懸けた願い

「ミルクとワインの町」は、町のキャッチフレーズである。総人口6000人余りの小さな町ながら酪農とワインで成功し、いまでは年間約50万人の来訪者を誇る葛巻町。

ミルクとワイン。この二大産業の成り立ちを知るために、くずまき高原牧場とくずまきワインを訪ねることにした。

まず初めにお会いしたのが葛巻町畜産開発公社の高宮晴彦さん。高宮さんは「くずまき高原牧場」を立ち上げた時からの職員で、牧場の変遷をその目で見てきた人でもある。

「葛巻町畜産開発公社は、昭和51年に設立されました。町民が出稼ぎしなくてもいいように、東北一の酪農の町にしたいという当時の町長の願いが牧場経営の始まりでした。その願いが、国の広域農業開発事業から補助金を受けたことで実現に向かったんです」

当初の職員は、高宮さんを含めた10人。まだ10代だった当時の高宮さんは、トラクターオペレーターとして牧草地の管理に携わった。

「成功の秘訣？　それはやっぱり小岩井農場から経営のできる人が指導しに来てくれたからでしょう

1

2

3

4

5

6

7

8

1 「北緯40度ミルクとワインの町」と書かれた案内板。2 平庭高原のワインエリアにある森のこだま館。3 森のこだま館で体験できる裂き織り。4 田園風景に溶け込んでいる、かくれ里の名水。赤い鳥居が印象的。5 くずまき高原牧場で飼育されている羊。6 牧場産の製品を運搬するラッピングカー。7 牧場内で搾乳されたミルクでつくられた乳製品。8 チーズハウスくずまきではチーズの製造も見られる。

ね。初代と二代目の専務が牧場づくりの基礎をきっちり教えてくれたんですよ」

公社のあるくずまき高原には350haの牧草地を切り開き、牛舎を建てた。さらに標高約1000mの上外川高原と袖山高原の2カ所にも牧場を開発し、いまでは1100haの牧場運営に成功している。

昭和50年代には町内の酪農家全部で約4000頭だった牛も現在は1万頭を超えるほどに。公社は、町内や全国の酪農家からメスの子牛を預かり、妊娠牛にまで育ててから返すという預託事業も軌道に乗っている。さらに牧場のミルクで製造された乳製品は、くずまきブランドとして全国的な人気商品に成長した。

「設立以来41年、牛を育てるだけでなく、ホテルやチーズづくりなど、事業を一つひとつ増やし、100人を超える人を雇用できるまでになりました」

という高宮さん。それは牧場立ち上げ当初からの切なる願いであった。活気ある牧場の原動力と余裕は、一つひとつの夢を実現してきたからなのだという気がした。

1 急な斜面で骨太に育てられる、牧場の乳牛たち。2 葛巻町畜産開発公社の専務理事 高宮晴彦さん。3 濃厚な味わいの牧場産、くずまき高原牛乳。4 株式会社岩手くずまきワインの専務取締役 漆真下さんと筆者。山ぶどうを使ったブランデーとワインの前で談笑。5 白樺林に囲まれたくずまきワイン工場。尖った屋根が可愛い。6 畑で栽培されていた山ぶどう。収穫時期の10月には黒紫に色づく。

青々とした牧草が広がるくずまき高原牧場。

山ぶどうで町興しも苦節続きのワイン造り

旅の最後に向かった先は「くずまきワイン」の製造工場である。

葛巻町のワインは一般的なぶどうではなく、山ぶどうを使用しているのが特徴で、その製造過程を見学させていただいた。

果汁を搾る圧搾や、赤ワインをタンクに入れて発酵させる醸造。どの過程も初めて目にする作業ばかりで、知らず知らずのうちにテンションが上がってしまう。どこからかほんのり甘い香りが常に漂ってくるので、ワイン好きにはたまらない頬の緩む時間となった。

「ワインづくりは町興しのために始まったんです。地元に自生している山ぶどうを使って、何かできないかと」

今年で創立32年となる会社の成り立ちを聞かせてくださったのは株式会社岩手くずまきワインの漆真下満（うるしましたつる）さん。初期の頃は山ぶどうの酸っぱさが裏目に出て「葛巻のワインは美味しくない」との評判に肩を落としたという。

だが山ぶどうを使う製法を諦めることはしなかった。なぜなら町民にとって山ぶどうは「お産後の女性や病人のお見舞いに持っていく」ほど滋養のある果実。実際に山ぶどうの成分を検出した結果、鉄分やポリフェノールの含有量がぶどうやブルーベリーより高いという事実も証明されている。

「利益が出るまでは大変でした。でも山ぶどうの量を変えてつくるなど改良を重ねたんです」

やがて漆真下さんたち職員の努力は実を結び、業績は右肩上がりになっていく。平成28年度には年間4億5000万円を超える売り上げがあり、今では誰もが認める町の主要産業となっている。

「山村には、人間になくてはならないものが残っているんです。それを自分たちは追究しています。私たちがやっていることは山を循環させるということなんです」

という漆真下さんの言葉が印象的だ。確かにワイン造りも牧場での牛飼いも、山を活かし、山を守っていくことに違いない。

山を循環させる。

そのシンプルな営みこそ、この町の強さなのだと教えてもらった。

グリーンパワーくずまき風力発電所
所在地：岩手県岩手郡葛巻町
発電所出力：2万1,000kW（1,750kW×12基）
運転開始：2003年12月

逆川まで電気を送る送電線。

変電所にある変電設備。

風車の下で、佐瀬所長の説明を聞く筆者。

標高1000mを超える上外川地区に並び立つ風車。

大切なのは日々の点検
高地ならではの風力発電

葛巻町にある事業所を出発し、のどかな田園風景を車で走ることおよそ40分。標高1000mを超える上外川（かみそでがわ）高原に、「グリーンパワーくずまき風力発電所」の白い風車が間隔を空けて並び立っていた。

「風車は全部で12基あります。1基あたりの発電出力は、1750kW」と風車を見上げながら説明してくださるのは佐瀬見司所長。

年間で約5400万kWの予想発電量があり、これは約1万6000世帯分の電力消費量に相当する。

佐瀬所長に「所員の方の重要な任務は」と伺えば、設備の巡視点検や補修工事だと教えてくださった。

点検は5月から7月にかけての1年点検、10月から11月にかけての6カ月点検、さらに1カ月に1回の巡視点検があり、1基につき半日を費やすという。さらに風車が止まるなどのトラブルが発生すれば、随時補修工事も行われる。

「冬場は雪が積もるので、途中からはスノーモービルで移動します。一番手前の風車から奥の風車までたどり着くのに1時間。変電所までだと2時間かかる時もあります」

冬期は風車の中でもマイナス5℃から10℃まで気温が下がるというのだから、どれほど大変な作業なのかと頭が下がる。

ふと、地上に送電線が見えないことを不思議に思いたずねてみれば、「ここは標高が高いので風が強く、樹が揺れるんです。それに牛の放牧地でもあるから、景観にも考慮してるんですよ」と佐瀬所長。

送電線は土の中に埋没させて通しているのだと知り、自分の知らないいろいろな配慮がされているのだと感心する。風車と高原と牛の見事な調和。そして遥か先に望んだ岩手山の美しさが、心に残る見学になった。

1 「くずまき風力発電　6km」と書かれた案内板。

2 事務所内で打ち合わせ中の佐瀬所長と所員の方々。

3 制服には「JWIND SERVICE」の口ゴ。

4 風車の出入り口。小さなドアのようでも、近づくと見た目より広い。

5 風車の中に設置されているエレベーター。地上53mのところまで上れる。

6 タワー内のボトム（底）から見上げた様子。

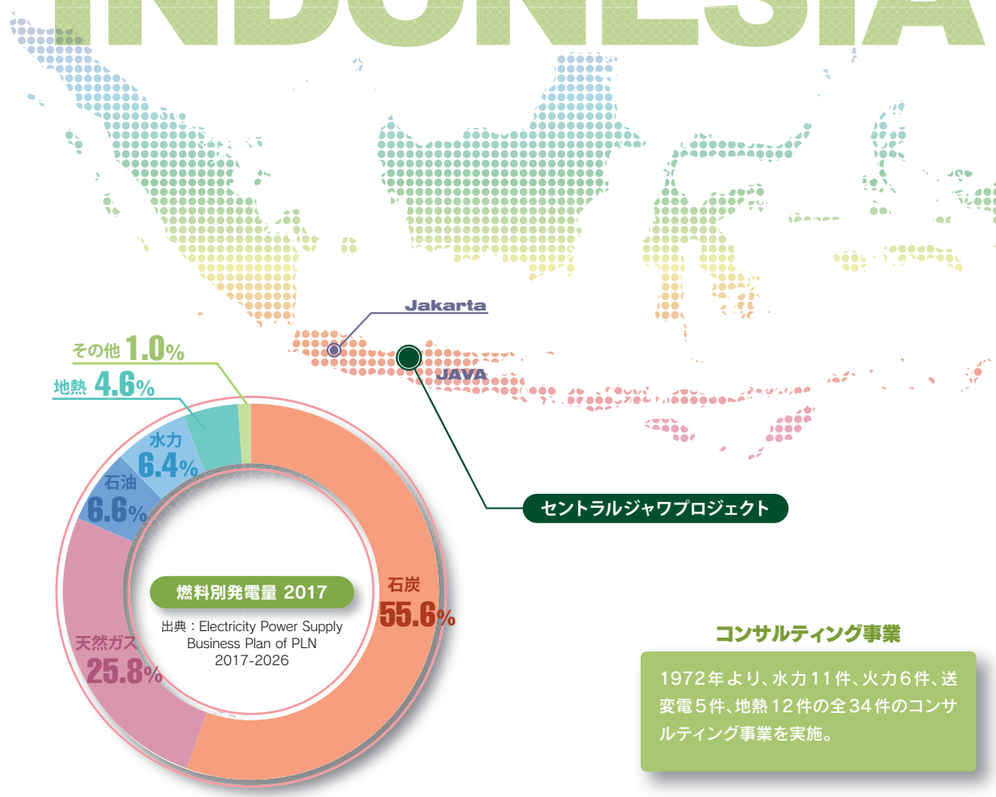
7 変電所の屋外に設置された装置。

8 変電所内にある監視制御盤。

01 クリーンで高効率の石炭火力発電所を建設中

INDONESIA

インドネシア国の発展とともに



経済発展の著しい資源産出国

インドネシア国は、約2億5500万人という世界4位の人口を持ち（2015年）、経済発展の著しいASEAN（東南アジア諸国連合）の中で、もっとも人口の多い国だ。GDPは8619億ドル（世界16位、ASEAN最大）を超え、近年は約5%前後という高い成長率を誇る。親日国としても知られ、日本からも製造業を中心に1700社を超える企業が進出している。

インドネシア国は、石油・天然ガス・石炭などの鉱物資源の産出国だが、自国の経済発展に伴い、国内でのエネルギー消費が増加し、石油・天然ガスについては、近い将来に輸出できなくなると予想されている。一方、石炭については世界でもベスト5に入る石炭生産国であり、その多くを海外、特に日本に輸出している。

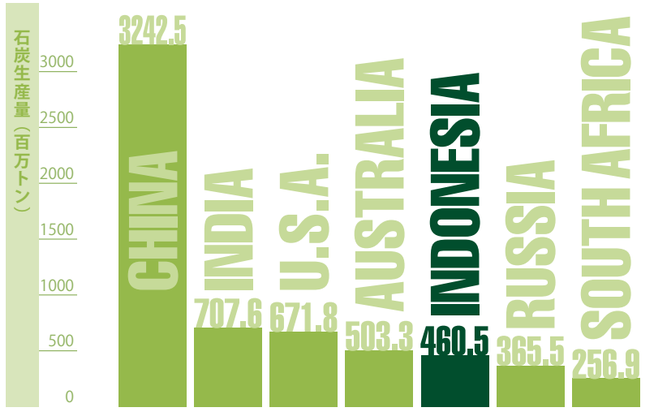
最大規模の石炭火力を建設中

Jパワーはこのインドネシア国で、1970年代から水力11件、火力6件、送変電5件、地熱12件、合計34件のコンサルティング事業を実施するとともに、同国から長年にわたり石炭を輸入し、発電事業を行ってきた。

コンサルティング事業

1972年より、水力11件、火力6件、送変電5件、地熱12件の全34件のコンサルティング事業を実施。

02 主要国の石炭生産量 2016



出典：IEA Coal Information 2017 より作成

03 セントラルジャワプロジェクト 概要

プロジェクト名　セントラルジャワプロジェクト

地点　インドネシア共和国中部ジャワ州バタン県

発電方式　超々臨界圧石炭火力発電
（Ultra Super Critical）

出力　200万kW（100万kW×2）

燃料　インドネシア産亜瀝青炭

スキーム　BOOT
（Build-Own-Operate-Transfer）方式

出資者　J-POWER 34%
ADARO POWER 社 34%
伊藤忠商事株式会社 32%

電力販売先および契約期間
販売先：インドネシア国有電力会社
（運転開始後 25 年間）

保守運営　BPI にて実施

セントラルジャワプロジェクトの現地スタッフ。

04 これまでの経緯と予定

2011.07 Bhimasena Power Indonesia（PT.BPI）設立
2011.10 電力購入契約（PPA）締結
2013.08 環境影響評価による許認可取得
2015.12 発電所用地取得完了
2016.05 EPC コントラクタに発電所用地引き渡し
2016.06 融資契約締結、建設着工
2020.06 1号機営業運転開始予定
2020.12 2号機営業運転開始予定

Jパワーの石炭火力は、自然環境に優しく、高効率な「クリーン・コール・テクノロジー」として有名だが、インドネシア国はこうした技術に注目、ジャワ島中央部で同技術のモデルケースとして進めているのが「セントラルジャワプロジェクト」だ。同プロジェクトでは、2011年7月にJパワーはじめ3社が協同でBhimasena Power Indonesia（PT. BPI）を設立、2016年6月からジャワ州バタン県に、合計出力200万kW（100万kW×2）の火力発電所の建設を進めている。

同発電所は、燃料に同国産の亜瀝青炭を使用し、環境負荷が少ない超々臨界圧（USC）技術を使った発電方式を導入するもので、長崎県にあるJパワー松浦火力発電所と同等の設備となる予定だ。

着工から1年半が経過し、土木工事のほか機械電気工事も加わり、工事は最盛期を迎えている。Jパワーの海外案件としては過去最大の27名の社員を派遣。現地社員の数も100名を超え、一致団結して施工監理に取り組んでいる。

現地駐在の入江高志社長は、「ローカルスタッフは、いつも明るく前向きです。我々が煮詰まりがちな状況でも、その素敵な笑顔で心を癒やしてくれる良き仲間たちです」と語る。

2020年の営業運転開始を目指しており、完成すれば同国最大規模のIPP（独立系発電事業者）となり、運転開始後25年間の長期売電契約（PPA）に基づき電力供給を行う予定だ。

POWER PEOPLE

J-POWER茅ヶ崎研究所

◀ 神奈川県茅ヶ崎市 ▶

「技術的な知識を積み重ね、信頼に応えていきたいです。」

■ Jパワー　茅ヶ崎研究所　庄路 友紀子

未曾有の豪雨や大規模地震の発生などが危惧される中、電力会社の防災・減災への取り組みも一層の高度化が求められている。Jパワーの茅ヶ崎研究所は、全国各地の現場からの要請に応じて地盤調査や環境評価、各種の実験、解析などを行う一方、設備更新や低炭素化技術といった中長期的課題を研究する拠点である。

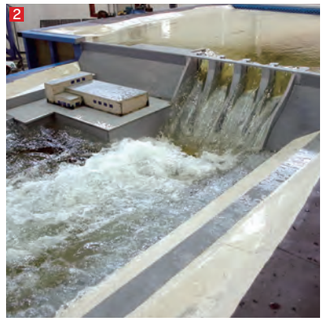
入社9年目の庄路友紀子さんは、土木系技術者として東京の本店と静岡・天竜川流域の事務所に勤務の後、当所の土木技術研究室に配属。水力発電所の堆砂対策に関する実験、解析などを経て、現在は主に発電所の安定運用に寄与するために設備周辺斜面における安定性評価などを担当している。

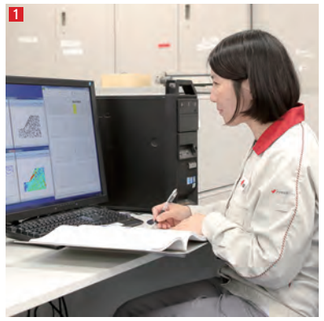
「天竜川での現場経験を、ダム貯水地における堆砂対策に関する研究課題に活かすことができました。現在のテーマは地盤、斜面、土構造物に移りましたが、発電所運用に関わる技術的な知識が身についていくのを実感しています」

また、ダム湖流域の山肌が崩れた場合の影響を解析し、斜面の安定性を評価する仕事では、地域の信頼に応えられるよう取り組んでいく大切さを感じたという。万が一災害が現実になれば、周辺に住む方々の生活基盤を揺るがしかねないのだ。

「その解析には他部署が取り組んでいる航空レーザー測量結果を用います。近年はドローンによる測量やSAR衛星画像など計測技術が発達してきており、これらの計測データを駆使してより効率的な解析を行いたいと考えています」

取材・文／内田 孝　写真／斎藤 泉





1 ダムなどの構造物の対災害性能を評価するには、数値解析が欠かせない。 2 ダムの水理模型実験装置。災害発生時の事象を再現。 3 ロックフィルダムの遮水性能を検証する特殊な実験装置。 4 築後100年にわたり強度試験を行うため、ダム建設時に製作した100年分のコンクリート供試体が保管されている。 5 研究者ごとの解析結果を持ち寄り、課題解決に向かうチームワークも重要だ。

1959年、アイルランド生まれ。翻訳家、日本文学研究者、詩人、英文学博士。アイルランド国立大学卒業後、プリンストン、コロンビア、オックスフォードの各大学で客員研究員を務める。日本在住歴は25年を超える。『小倉百人一首』、『伊勢物語』の英訳、講演、書籍の執筆など幅広く活躍中。

翻訳家・詩人・研究者・アーティスト

ピーター・J・マクミラン

日本の精神と詩歌を言祝ぎ広く世界に知らしめたい

13世紀の前半、公家・藤原定家が撰集した『小倉百人一首』。今でも、〝かるた〟として親しまれており、正月の風物詩としても馴染みが深い。その百人一首をこよなく愛し、敬意を捧げているのが、翻訳家であり、詩人として活躍するピーター・J・マクミランさんである。

「百人一首には、恋愛の悩みや惜別の思いなど、時代や文化を超えて人の心に響く普遍的な歌（※1）がある一方で、日本独特の情緒を表現した歌もあります。例えば、山桜と情を交わすという発想（※2）や、花ははかないからこそ美しいという感性は、日本ならではのものです。英訳では、和歌に見られる隠喩表現やかけ言葉など難しい部分もありましたが、日本的な情緒が伝わる翻訳を心がけました」

言霊（ことだま）（言葉に宿る力）を信じる詩人として、日本の詩歌に魅了されたというマクミランさん。その味わい深さを、ぜひ世界の人々に知ってもらいたいと、「英語版百人一首かるた」も製作し、かるた大会を開催している。

「詩とカード遊びの融合は、世界的に見て、極めて珍しいものです。『英語版百人一首かるた』では、歌の世界をイラストで表現しました。これによって、『下の句が早く探せる』、『楽しみながら日本文化を学べる』と、外国人はもちろん、日本の学生たちにも好評でした」

今後、母国アイルランドを始め、英国や米国などで、英語版の百人一首大会を開催する予定もある。

「私の仕事は、日本の精神と文化を言祝ぐ、つまり喜びをもってその素晴らしさを讃え、広く伝えることです。日本人の皆さんにも、自国の豊かな文化に誇りを持ち、もっと目を向けてほしいと願っています」

日本らしい情緒があふれる豊かな詩歌の世界。従来の百人一首はもちろん、英語版で遊んでみるのもまた、一興である。これまで気づかなかった日本の魅力が見えてくるかもしれない。

英語で読む百人一首（文春文庫）
ピーター・J・マクミラン著

歌の世界がイラストでも表現され、文字だけのかるたよりも分かりやすく、視覚的にも楽しめる。欧米人に馴染みやすいサイズ（トランプ大）にする工夫も。

取材・文／ひだい ますみ　写真／竹見 脩吾

※1　由良の門を渡る舟人かぢを絶え　ゆくへも知らぬ恋の道かな（46番・曽禰好忠）
※2　もろともにあはれと思へ山桜　花よりほかに知る人もなし（66番・前大僧正行尊）

匠の新世紀

株式会社鮒佐　東京都台東区浅草橋

食品保存の知恵と伝統の味を守り続ける

ご飯のお供として定番ともいえる佃煮。
現在のような醤油味の佃煮の原型をつくり出した店が東京都台東区にある。
一子相伝で伝統の味を守り続ける同店を訪ね、
伝統を守り続けることの難しさや
ものづくりにかける思いについて聞いた。

素材に味がしみた瞬間を目で見極め、敷きざるを上げると、湯気がもうもうとあがる。

1. 昭和22年から継ぎ足しのタレでじっくりと煮込む。
2. 燃料は薪。強い火から柔らかい火まで調節が可能。
3. 調理に使用したタレはざるでこして再び使用する。
4. 5種類の佃煮の詰め合わせ。
5. 煮上がったごぼう。

株式会社鮒佐
代表取締役社長
大野佐吉さん

良質の醤油との出合いで佃煮が生まれた

東京都台東区浅草橋にある株式会社鮒佐は、醤油味の佃煮の原型をつくった店として知られる（※諸説あります）。同社社長の5代目大野佐吉さんは、佃煮の誕生について次のように語る。

「佃煮というのは、江戸時代に佃島（東京都中央区）で生まれたことから佃煮というのですが、売りものにならない小魚がもったいないと、漁師たちがそれを塩煮にして保存食にしたものと言われています。

1862年（文久2年、明治元年の6年前）に、当店の初代大野佐吉が、小魚を種類ごとに分け、当時は高級品だった醤油と砂糖を使って調理した佃煮を考案し、この場所で売り出したのが当店の始まりです」

初代佐吉が生まれた頃には下総（現在の千葉県）で良質の醤油がつくられるようになっていた。船橋出身の初代佐吉はこれを利用し、川で獲れたフナに醤油を付けて焼く〝鮒のすずめ焼き〟を売っていたが、塩煮の佃煮と出合い、これに醤油を用いることを思いついた。

鮒佐の佃煮は、長期保存ができ、味もよいことから評判となり、店は繁盛した。その後、小魚だけでなく、ごぼう、海老、昆布などを加え、もっとも多い時には20種類以上の品を揃えたという。

職人任せにせず社長自ら現場に立つ

鮒佐には「家業に誠実たれ」という家訓が伝わるが、大野さんはこれに従い、社長業のかたわら、今も毎日製造場に立つ。

実際に佃煮をつくる作業を見せていただいた。同店では現在も、〝へっつい〟（かまど）で製造を行っている。

最初にかまどに火を着け、鍋の上に竹でできた敷きざる（煮ざる）をセット。生醤油と継ぎ足しのタレを鍋に入れ、煮汁が高温になったところで素材を投入。火加減を見ながら、ときおりタレを加え、素材を煮ていく。途中で砂糖を加え、素材が煮上がったタイミングを見極め、敷きざるごと引き上げて、盆ざるにあければほぼ完成だ。この間、約30分（しらすは約20分）。この短い時間が素材の味を最大限に引き出すことのできる時間だ。

大野さんは22歳の時から、30年以上にわたって、この作業を続けてきた。

「子どもの頃から手伝いをしてきましたが、一人前になるには時間がかかりました。タレや砂糖を入れる頃合い、素材を引き上げるタイミングなどは教えられても自分のものになりません。自分でやってみて、納得したものは忘れません」

驚くのは一切、味見をしないことだ。

「舌で判断すると、その日の体調によって味がぶれます。タレの泡立ち方や照りなどを見て、味覚ではなく視覚で判断するのです」

素材を煮上げたあとのタレは桶に戻し、次の製造に利用する。当時は貴重だった醤油や砂糖を一切無駄にしないとともに、各素材の出汁がタレに追加され、時を重ねるにつれて、複雑な味になっていく。鮒佐の佃煮はこのタレがあってのもの。大量生産するとタレが〝疲れる〟ため、店売りだけに徹している。

安全な保存食としての佃煮の滋味と味の深み

鮒佐の佃煮は、市販の佃煮に比べると塩気が強い。それは塩分を使って防腐剤を入れずに衛生状態を保つという日本人の知恵だ。

「佃煮は主役ではなく、ご飯やお酒などと一緒に食べるものです。ですから、佃煮の量を自分で調整しながら楽しむものです」

実際、ご飯多めで食べると素材の味がしっかりと味わえるのが鮒佐の佃煮。一般的な甘い佃煮とは一線を画す伝統の味だ。

「お店でお客様から、お豆腐に載せて食べるとおいしいとか、夏場の暑い時はご飯に氷水をかけて一緒に食べるとおいしいとか教えていただきます。つくっている我々も知らなかった食べ方ですね」

現在、通年でつくっている佃煮はごぼう、あさり、海老、しらす、昆布、穴子の6種類。これに9月下旬から11月上旬ごろは季節限定で小はぜが追加される。埋め立てや湾岸整備などにより、江戸前の素材の入手が困難になり、現在使用している食材も、各地から質のよいものを取り寄せたものだ。さらに、食材だけではなく、鍋や敷きざるなどの道具も、これまでと同じものを手に入れるのは難しくなっている。

最後に大野さんに、五代目としてのこれからの抱負を聞いた。

「伝統の味をしっかりと守り後世に伝えていきたいと思います。我流に走って新しいものに挑戦するよりは、のりやはまぐりなど、今はなくなってしまった品を復活させたいと思っています」

鮒佐のものづくりには、自然の恵みを無駄にしない〝もったいない精神〟と、食材を大切にしながら、安全に長期保存する日本人の知恵が隠されていた。

株式会社鮒佐
1862年（文久2年）創業の佃煮専門店。醤油を使った現在のような佃煮の原型をつくった店。創業者の初代大野佐吉さんが〝鮒のすずめ焼き〟を販売していたことから「鮒屋の佐吉」と呼ばれ、それが店名の起源となった。当主は代々大野佐吉を名乗り、現在5代目が社長を務める。
http://www.funasa.com/

取材・文／豊岡 昭彦　写真／斎藤 泉

明治時代の掛け紙（包装紙）には白魚漁の様子と当時の品書きが掲載されている。

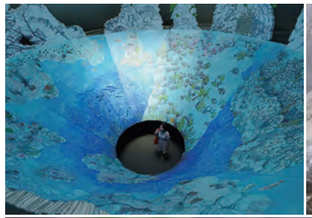
店頭に立つ5代目大野佐吉さんと長男の真徳さん。

JR浅草橋駅から徒歩3分のところにある鮒佐。歴史を感じる重厚な看板が目を引く。

時空を超え、「まだ見ぬ世界」を描く

アーティスト　康　夏奈

山や海をダイナミックに描いたパノラマ作品をはじめ、
発砲スチロールを湖に浮かべたオブジェ、
絵画パネルを立体的に組み合わせた作品など、
数々の斬新な作品で今、熱い注目を浴びている
アーティスト康 夏奈さん。
その目に映る、世界のありかたとは？
新しい視点と表現を追求するアーティストの創作魂に迫る。



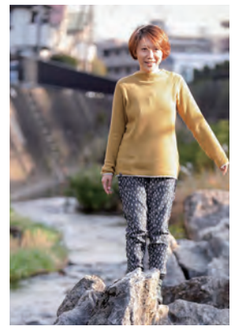
康夏奈さんが描くパノラマは、息をのむほど緻密である。葉っぱや水の粒に宿る極小の生命の声が聞こえるかのようだ。しかし、それは大きなうねりとして、迫る。

「人間の体と同じように、森も海も、とても小さいものから成っています。だから、よく観察して、その構造を反復し、集積して描きます」

自然に興味を持ったのは、屋久島での体験がきっかけだという。

「満月の夜、ウミガメが卵を産むために続々と浜に上がってきました。人間は私だけ。強大な自然の世界に入り込み、怖いと思いました。ところが次の瞬間、このような『まだ見ぬ世界』をもっと知りたいと思いました」

康さんは、山に登り、海に潜る。太陽の光、水面の揺れなど、一瞬一瞬の光景を体に記憶する。その記憶の破片を重ねて描く過程から、康さんは自分の絵を、その場で見たものを描いた風景画ではなく、時間を超えた風景描写だと考えている。



康さんの作品は、空間の制約も超える。例えば、「Panoramic Lake」という作品では、湖上を飛ぶ鳥が空から俯瞰しているように、湖に映り込む景色を見渡せる。また、「花寿波島の秘密」では、島の周りを泳いでとらえた、水中と陸上の感覚を、逆円錐型の内側に描いている。

「この作品を見た人から『浮力を感じる』と言われました。確かに、遠近の逆転によって、空間のとらえ方に変化が起きます。新しい手法に気づき、うれしくなりました」

康さんは「物質は重くて遅いが、意識やエネルギーは軽快で目に見えないので、その関係が面白い」と、意識やエネルギーをテーマに挑戦し続ける。彼女が見せてくれる「新しい世界」が楽しみである。

profile

こう　かな
1975年、東京都生まれ。広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科卒業。2006年、アーティスト・イン・レジデンス・プログラム（米国ロサンゼルス）をはじめ、フィンランド、香川県（小豆島）のプログラムにも参加。国内外で個展・グループ展を開催し、活躍中。
http://artfrontgallery.com/artists/Kana_Kou.html

上右／「Panoramic Lake」という作品。鳥の視点によって描かれた風景は、空中を浮遊しているかのような感覚をもたらす。

上中／伊東敏光＋康夏奈＋広島市立大学芸術学部有志による「潮耳荘」。古材を用いて大型の立体作品を制作。海に向かってホルンのような形の集音器が出ていて、内部空間全体に海の音が響く構造になっている。

上左／三都半島の沖に浮かぶ無人島、花寿波島をモチーフとした「花寿波島の秘密」。瀬戸内国際芸術祭2013年を代表する作品として高い評価を受けた。

取材・文／ひだい ますみ
写真／竹見 脩吾

J-POWERの地域共生活動 from 石川

アユへの思いを込めた「アユ産卵床清掃ボランティア」に参加
～J-POWER手取川第一発電所（石川県）～

霊峰白山を源とし、日本海へ注ぐ長さ72kmの石川県最大の河川、手取川（てどりがわ）。2017年９月23日に下流域にて、「アユ産卵床清掃ボランティア」が行われました。J-POWER手取川第一発電所では、天然アユを増やすためのこの取り組みに2009年の初回から参加しています。

「アユ産卵床清掃ボランティア」は、手取川の環境再生を目指すために白山手取川漁業協同組合を中心に、手取川流域の関係団体で組織される「手取川を愛する会」の主催で行われています。

アユは清流を好む魚で、「年魚」と呼ばれ、１年で生涯を終えます。秋に下流域で生まれ一度海に下り、春の桜の咲くころになると川を遡上（そじょう）します。生まれた川の水の匂いを覚えているため、生まれた川に戻ってきて、また秋になると産卵のために下流へと下り下流域で産卵し、親魚は短い生涯を終えます。

流れが緩やかな下流域の汚れが付着していないきれいな小砂利に産卵するため、川の底に埋まっている小砂利を三つ鍬で掘り、手で新たに小砂利を川に投げ入れます。大きな石には産卵しないため、川の中にある大きな石は取り除く必要があります。また、小砂利の表面が汚れていると卵が付着しないため、竹ほうきを使って付着した汚れを取ります。

当日は午前10時から約1時間、照り付ける日差しのもと、約150人の参加者たちは持参した道具を使い汗だくになりながら清掃を行いました。子どもも多く、家族で楽しみながら清掃している様子も見受けられました。多くのアユがここで産卵し、またたくさんのアユがこの手取川に戻ってくることを願い、清掃活動は終了しました。

九頭竜電力所（白山市駐在）・松元義己所長補佐は、「手取川第一発電所は、1979年の運転開始以来、地域の皆さまのご理解をいただき、手取川の水を利用して発電事業を行っています。水を利用させていただいている発電事業者として、またこれからも地域の皆さまから信頼される発電所として、継続的に『手取川を愛する会』の活動に参加していきたいです」と話しました。

1

2

3

4

1 J-POWERも加入する「手取川を愛する会」。地域一体となって活動をしている。 **2** 清掃活動を終え、達成感の表情を見せるJ-POWERグループの参加者たち **3** 約１万平方メートルの範囲を清掃。川の中での清掃作業は足が埋もれ、なかなか思うように動けないことも。 **4** J-POWER 九頭竜電力所（白山市駐在）所長補佐　松元 義己

こじま なお
東京都出身。2004年角川短歌賞受賞。2007年第一歌集『乱反射』により現代短歌新人賞、駿河梅花文学賞受賞。2011年、第二歌集『サリンジャーは死んでしまった』刊行。

「音のソノリティ」を詠む

――糠平湖のきのこ氷――

歌人 小島 なお

糠平湖はJ-POWERが運営する糠平ダム・発電所のダム湖。冬には氷が張り、その上を人が渡ることもできる。　写真：田中正秋／アフロ

ぎしぎしときのこ氷がせりあがる糠平湖　傘にあおい陽が差す

カタリ、コンコン、ギシギシ。木の床を踏み鳴らすような、古い戸が軋むような、雨垂れが屋根を打つような音。

北海道・河東郡、大雪山系を臨む糠平（ぬかびら）発電所のダム湖、糠平湖。その不思議な音は、凍結した湖にきのこ氷が現れる冬の間だけ聞こえてくる。きのこ氷とは、湖面の結氷後、発電によって水位が徐々に低下し、かつて森だった湖底や湖岸の切り株の上に氷が取り残されてできる自然の造形物である。切り株の部分が押し上げられることで高低差ができ、湖のいたるところで氷のひび割れる音が響く。雪が少なく、水位変動が激しいことが条件で、糠平湖のみでしか見られない現象だ。多いときで大小１００個以上が現れ、氷の厚さによって様々な音が生まれるという。

冬の陽射しをあおぐ照りかえす雪。きのこ氷の傘に、光と影がくっきりと刻まれている。

※「音のソノリティ」第１５１回放映（糠平湖のきのこ氷）を観て詠んでいただいたものです。

音のソノリティ 世界でたった一つの音
J-POWER は、首都圏で放送中のミニ枠テレビ番組「音のソノリティ～世界でたった一つの音～」を提供しています。「ソノリティ」とは、フランス語の音楽用語で「鳴り響き」の意味。日本の自然風景から、その場所でしか聞くことのできない音を紹介しています。
日本テレビ
毎週日曜日 20：54 ～（関東ローカル）
BS 日テレ
毎週水曜日 20：54 ～（再放送）

J-POWER写真展「風姿花景」を開催

J-POWERは、2017年11月27日（月）～12月8日(金)までの土日を除いた10日間、本店１Ｆロビーにて写真展　「風姿花景」を開催しました。本展では、2018年版J-POWERオリジナルカレンダーの使用写真13点のほか、日本の美しい風景写真を加えた合計24点の作品を紹介しました。自然の力が美として姿を現した瞬間をとらえた写真で、季節の変化とともに日本を巡り、環境と共生しながら未来に向かって進むJ-POWERの姿を感じ取っていただきたいという願いを込めました。

また、開催期間中、アンケートにお答えいただいた来場者には、2018年版J-POWERオリジナルカレンダーをプレゼントし、大変好評を得ました。

写真家：石谷修三／大島玲子／大堀千春／鎌形久／川隅功／玄一生／高橋弘／館野二朗／星野佑佳／三澤佳澄／望月久／武藤守（五十音順・敬称略）

大きな写真パネルがロビーいっぱいに並びました。

近隣企業に勤める方が昼休みに立ち寄られる姿も。

読者プレゼント

「Home of J-POWER」で紀行文を書いていただいている小説家・藤岡陽子さんが最新作『満天のゴール』（小学館）を出版されました。過疎、独居老人、無医村、いわゆる「僻地医療」をテーマに、人の「生死」が鮮やかに描き出されています。家族の成長や人と人との温かなつながりも描かれていて、生きることへの肯定感を覚えさせてくれる作品です。ご応募いただいた方から抽選で、5名様にプレゼントいたします（藤岡さんのサイン入り・お1人様1冊まで）。

応募方法

郵便ハガキに、①郵便番号　②住所　③氏名　④本誌のご感想を明記の上、下記住所「J-POWER『グローバルエッジ』編集室」宛てに3月8日（木）（消印有効）までにご応募ください。

個人情報は、発送のためにのみ使用させていただきます。なお、当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。

お詫びと訂正

GLOBAL EDGE51号「Opinion File」コーナーに一部誤りがございました。
謹んでお詫び申し上げますとともに、右記の通り訂正させていただきます。

（訂正箇所）16ページ下段
（誤）苫小牧CCS大規模実証試験事業の出資者～
（正）日本CCS調査株式会社の出資者～

2018年1月15日発行
発行：電源開発株式会社　〒104-8165 東京都中央区銀座6-15-1　TEL：03-3546-2211（代表）
URL：http://www.jpower.co.jp/　e-mail：webmaster@jpower.co.jp
編集・発行人：広報室長 中谷 博　（非売品）

VEGETABLE OIL INK
FSC www.fsc.org ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C004698

タイ国企業とクリーン・コール・テクノロジーの共同検討覚書を締結

J-POWERは、2017年9月8日、タイ国企業とクリーン・コール・テクノロジー（CCT）に関する共同研究に向けた覚書（MOU）を締結しました。

バンコクで行われた調印式には、J-POWERから村山均副社長が出席しました。MOUの内容は、情報共有、技術発展、プロジェクトでの協働可能性の検討であり、J-POWERとしては、商用化を目指し実証試験に取り組んでいる酸素吹石炭ガス化複合発電（IGCC）の技術も含めて、これまでに培ったCCTの知見の広いレパートリーの中から、両社のニーズに合致したプロジェクト構想をつくり上げていきたいと考えます。村山副社長はスピーチで、CCT技術の発展・普及とプロジェクトの実現について、10年20年先までを視野に入れる考えを示しました。相手方は環境負荷の低減のニーズに触れ、特にIGCCについては、石炭のガス化が発電にとどまらない活用の可能性を持っていることを中心に期待を述べました。

2016年12月には、台湾の企業とも同種のMOUを結んでいます。

J-POWERは今後も、世界各国が求める環境、エネルギー、経済が調和した発展に貢献していきます。

MOUに署名する両代表者。

調印式での集合写真。

新桂沢水力建設所の設置について

J-POWERは、新桂沢発電計画を推進するため、2017年10月１日に北海道岩見沢市に「新桂沢水力建設所」を設置しました。

本計画は、国土交通省（北海道開発局）の幾春別川総合開発事業の一環として桂沢ダムがかさ上げされるのに伴い、既設の桂沢発電所を廃止し、新たな発電所の建設を行うとともに、ダム水位上昇により冠水する熊追発電所の改造工事を併せて行うものです。本年４月に熊追発電所の改造工事に着工し、熊追発電所は2022年4月、新桂沢発電所は同年６月の運転開始を予定しています。

今後は、貴重な再生可能エネルギーの活用を図った最新の発電所の建設に向けて、安全確保と環境保全に努めていきます。

除幕した建設所看板前にて。

新桂沢発電計画

	桂沢発電所		熊追発電所	
既設/新設（改造）	既設	新設	既設	新設
許可出力（最大）	15,000kW	16,800kW	4,900kW	5,100kW
使用水量（最大）	23.5㎥/秒	同左	4.0㎥/秒	同左